

# 県道関係埋蔵文化財発掘調査概報

平成 8 年度

川 津 川 西 遺 跡  
雄 山 古 墳 群  
兀 塚 遺 跡  
竹 元 遺 跡  
南 天 枝 遺 跡  
尾 端 遺 跡  
原 中 村 遺 跡  
寺田・産宮通遺跡

1997. 3

香 川 県 教 育 委 員 会  
財団法人 香川県埋蔵文化財調査センター

# 例 言

1. 本書は、県道改良事業に伴い平成8年度に実施した川津川西(かわつかわにし)遺跡、雄山(おんやま)古墳群、兀塚(はげづか)遺跡、竹元(たけもと)遺跡、南天枝(みなみあまえだ)遺跡、尾端(おばな)遺跡、原中村(はらなかむら)遺跡、寺田・産宮通(てらだ・さんのみやとおり)遺跡の計8遺跡の発掘調査の概要を記録したものである。
2. 本調査は、香川県教育委員会文化行政課が調査主体となり、財団法人香川県埋蔵文化財調査センターが調査担当者として実施した。
3. 本年度の財団法人香川県埋蔵文化財調査センターの調査組織は、次のとおりである。

総括	総務	調査
所長 大森 忠彦 次長 小野 善範	参事 別枝 義昭 係長 前田 和也 主査 西川 大 主査 西村 厚二(平成8年5月31日まで) 主査 佐々木隆司(平成8年6月1日から)	参事 近藤 和史 主任文化財専門員 廣瀬 常雄 主任文化財専門員 大山 真充
(川津川西遺跡)	(兀塚遺跡)	(雄山遺跡)
文化財専門員 谷畑雅稔 技師 信里芳紀 調査技術員 貞廣智代美	文化財専門員 森下友子 文化財専門員 樋本清輝 調査技術員 三好弘美	文化財専門員 中西 昇 文化財専門員 宮崎哲治 主任技師 多田 慎 技師 松本和彦
(原中村遺跡)	(南天枝遺跡, 尾端遺跡)	調査技術員 貞廣智代美 調査技術員 門脇範子
文化財専門員 北山健一郎 主任技師 吉田 智 調査技術員 森川 渉	文化財専門員 西村尋文 文化財専門員 山下浩行 調査技術員 松尾 歩 調査補助員 溝口幸一	
(林・下所遺跡, 寺田・産宮通遺跡)		
文化財専門員 山元素子 主任技師 山田秀樹 調査補助員 糸山 晋		

4. 調査に際しては、次の機関に協力を得た。記して謝意を表したい。(順不同敬称略)  
香川県土木部道路建設課、香川県長尾土木事務所、香川県高松土木事務所、香川県坂出土木事務所、地元各自治会、地元各水利組合
5. 本書で使用した遺構略号は、次のとおりである。  
SA: 柵列 SB: 堀立柱建物 SD: 溝状遺構 SE: 井戸 SH: 竪穴住居  
SK: 土坑 SP: ピット SR: 自然河川 SX: 性格不明遺構
6. 本書で用いている方向の北は国土座標第IV系の北である。
7. 本書の執筆は、調査各担当職員が分担して行い、執筆者名は目次に記した。挿図の作成・浄書についても調査各担当職員の分担以外に調査技術員森澤千尋が行った。また、編集は西村・宮崎が行った。

# 本文目次

I. 調査の経緯と概要 .....	(西 村)	1
II. 川津川西遺跡		
1. 遺跡の立地と環境 .....	(谷 畑)	2
2. 調査成果の概要		
(1) 縄文時代 .....	(信 里)	3
(2) 弥生時代 .....	( " )	3
(3) 古墳時代後期 .....	( " )	4
(4) 古代 .....	( " )	8
(5) 中世 .....	( " )	9
3. まとめ .....	( " )	10
III. 雄山古墳群		
1. 遺跡の立地と環境 .....	(多 田)	11
2. 調査成果の概要		
(1) 雄山7号墳 .....	(松 本)	12
(2) 雄山4号墳 .....	( " )	14
(3) 雄山5号墳 .....	(宮 崎)	19
(4) 雄山6号墳 .....	( " )	21
3. まとめ .....	(松 本)	24
IV. 兀塚遺跡		
1. 遺跡の立地と環境 .....	(樋 本)	25
2. 調査成果の概要		
(1) 弥生時代 .....	(森 下)	29
(2) 古墳時代 .....	( " )	29
(3) 鎌倉時代 .....	( " )	31
(4) 江戸時代 .....	( " )	33
3. まとめ .....	( " )	33
V. 竹元遺跡		
1. 遺跡の立地と環境 .....	(樋 本)	35
2. 調査成果の概要		
(1) 縄文時代晩期 .....	(森 下)	36
(2) 弥生時代後期 .....	( " )	36
3. まとめ .....	( " )	36
VI. 南天枝遺跡		
1. 遺跡の立地と環境 .....	(西 村)	39
2. 調査成果の概要		

(1) 古墳時代末 .....	( " )	40
(2) 中世 .....	( " )	43
(3) 近世前半 .....	( " )	45
VII. 尾端遺跡		
1. 遺跡の立地と環境 .....	(西 村)	50
2. 調査成果の概要		
(1) 縄文時代~弥生時代 .....	( " )	50
(2) 古墳時代末~奈良時代 .....	( " )	51
(3) 近世後半 .....	( " )	58
VIII. 原中村遺跡		
1. 遺跡の立地と環境 .....	(北 山)	59
2. 調査成果の概要		
(1) SH01 .....	( " )	61
(2) SR02 .....	( " )	63
(3) SR03・04 .....	( " )	66
3. まとめ .....	( " )	68
IX. 寺田・産宮通遺跡		
1. 遺跡の立地と環境 .....	(山 元)	69
2. 調査成果の概要		
(1) 弥生時代の遺構・遺物 .....	( " )	70
(2) 中世の遺構・遺物 .....	( " )	75
3. まとめ .....	( " )	76

# 挿 図 目 次

第 1 図	遺跡の位置及び周辺の遺構 (S=1/25,000) .....	2	第 34 図	南天枝遺跡遺構配置図 (1/400) .....	47~48
第 2 図	既往の調査区と今回の調査区区割り図 .....	2	第 35 図	南天枝遺跡掘立柱建物遺構配置略図 (1/600) .....	47~48
第 3 図	縄文包含層出土遺物実測図 .....	3	第 36 図	南天枝遺跡地形分類図 (1/2,500) .....	47~48
第 4 図	S R 0 1 出土遺物実測図 .....	4	第 37 図	S K 0 8 土層断面図 (1/80) .....	49
第 5 図	川津川西遺跡遺構分布図 (古墳時代終末~古代) .....	5~6	第 38 図	尾端遺跡位置図 (1/50,000) .....	50
第 6 図	S H 0 1 平面図及び出土遺物実測図 .....	7	第 39 図	S K 0 1・0 2 平・断面図 (1/40) .....	51
第 7 図	VI-1 区平面図及び S K 2 1 出土遺物実測図 .....	8	第 40 図	S B 0 4 平・断面図 (1/80) .....	52
第 8 図	VII-1 区第一面遺構平面図と S B 0 1 出土遺物実測図 .....	9	第 41 図	S B 0 7 平・断面図 (1/80) .....	53
第 9 図	周辺遺跡分布図 .....	10	第 42 図	S B 0 8 平・断面図 (1/80) .....	53
第 10 図	古墳分布状況図 .....	10	第 43 図	S D 0 3 平・断面図 (1/40) .....	54
第 11 図	雄山 7 号墳石室実測図 .....	13	第 44 図	尾端遺跡遺構配置図 (1/4,000) .....	57~58
第 12 図	雄山 7 号墳出土土器実測図 .....	13	第 45 図	尾端遺跡遺構調査区配置図 (1/25,000) .....	57~58
第 13 図	雄山 4 号墳石室実測図 .....	15~16	第 46 図	周辺遺跡分布図 .....	59
第 14 図	雄山 5 号墳石室実測図 .....	20	第 47 図	原中村遺跡遺構配置図 .....	60
第 15 図	雄山 5 号墳出土土器実測図 .....	21	第 48 図	S H 0 1 平・断面図 .....	62
第 16 図	雄山 6 号墳石室実測図 .....	23	第 49 図	S H 0 1 出土遺物実測図 .....	63
第 17 図	雄山 6 号墳出土土器実測図 .....	24	第 50 図	S R 0 2 土層断面図 .....	64
第 18 図	遺跡の位置と周辺の遺構 (1/50,000) .....	25	第 51 図	S R 0 3・0 4 土層断面図 .....	65
第 19 図	調査区割図 (1/3,000) .....	26	第 52 図	S R 0 2 出土遺物実測図 .....	66
第 20 図	遺跡の変遷 .....	27~28	第 53 図	S R 0 3 出土遺物実測図 .....	67
第 21 図	S H 1001 平・断面図 (1/80), 出土遺物 (1/4) .....	30	第 54 図	VII 区 S X 0 1 出土遺物 .....	70
第 22 図	兀塚遺跡出土土器 (1/4) .....	32	第 55 図	VII 区 S X 0 1 木製品出土状況 .....	70
第 23 図	遺跡の位置と周辺の遺構 (1/50,000) .....	35	第 56 図	遺構配置図 .....	71~72
第 24 図	調査区割図 (1/1,000) .....	37~38	第 57 図	VII 区 S H 0 1 平・断面図 .....	73
第 25 図	遺構配置図 (1/300) .....	37~38	第 58 図	VII 区 S H 0 1 出土遺物 .....	73
第 26 図	遺跡の位置と周辺の遺構 (1/25,000) .....	39	第 59 図	VII 区 S B 0 2 平・断面図 (1/80) .....	74
第 27 図	S H 0 1 平・断面図 (1/80) .....	41	第 60 図	VII 区 S B 0 2 出土土器 (1/4) .....	74
第 28 図	S H 0 3 平・断面図 (1/80) .....	41	第 61 図	VII 区 S B 0 3・0 4 平・断面図 .....	74
第 29 図	S B 1 0・1 2 平・断面図 (1/80) .....	42	第 62 図	VII 区 S B 0 1 平・断面図 .....	75
第 30 図	S D 0 1 土層断面図 (1/40) .....	43	第 63 図	VII 区 S D 0 1 断面図 .....	75
第 31 図	S B 2 3 平・断面図 (1/80) .....	44	第 64 図	VII 区 S X 0 2 断面図 .....	75
第 32 図	S E 0 1 平・断面図 (1/40) .....	45	第 65 図	VII 区 S D 0 1・S X 0 2 出土土器 .....	76
第 33 図	南天枝遺跡出土土器実測図 (1/4) .....	46			

# 写 真 目 次

写真 1	S R 0 1 完掘状況 (北より) .....	3	写真 43	S H 0 1 全景 (南より) .....	41
写真 2	S D 1 0・1 1 完掘状況 (南より) .....	4	写真 44	S H 0 3 全景 (西より) .....	41
写真 3	S H 0 1 完掘状況 (南より) .....	7	写真 45	S B 1 2・1 3 全景 (東より) .....	43
写真 4	S H 0 1 竪断ち割り (南より) .....	7	写真 46	S B 1 0 全景 (南より) .....	43
写真 5	VI-1 区完掘状況 (北より) .....	8	写真 47	S D 0 1・0 2 全景 (北より) .....	43
写真 6	IV-1 区第一面遺構分布状況 (北より) .....	10	写真 48	I a 区中世ピット群 (南より) .....	44
写真 7	S P 29・30 遺物出土状況 (西より) .....	10	写真 49	S E 0 1 全景 (東より) .....	45
写真 8	川津川西遺跡遠景 (北東より) .....	10	写真 50	I a 区全景 (東より) .....	45
写真 9	雄山 7 号墳全景 (北より) .....	12	写真 51	S D 0 8 南北溝全景 (南より) .....	46
写真 10	雄山 7 号墳石室全景 (南東より) .....	12	写真 52	S D 0 8 土層断面 (北より) .....	46
写真 11	雄山 7 号墳遺物出土状況 (南東より) .....	12	写真 53	II b 区全景 (西より) .....	50
写真 12	雄山 4 号墳墳丘全景 (北西より) .....	14	写真 54	II c 区全景 (東より) .....	50
写真 13	雄山 4 号墳玄門部と閉塞石 (南東より) .....	17	写真 55	S K 0 1 全景 (北より) .....	51
写真 14	雄山 4 号墳周溝出土円筒埴輪 (表) .....	18	写真 56	S K 0 2 全景 (南より) .....	51
写真 15	雄山 4 号墳周溝出土円筒埴輪 (裏) .....	18	写真 57	S K 0 1~0 3 全景 (西より) .....	52
写真 16	雄山 4 号墳出土人物埴輪 .....	18	写真 58	S B 0 4 全景 (南より) .....	52
写真 17	雄山 5 号墳全景 (西より) .....	19	写真 59	S B 0 7・0 8 全景 (南より) .....	54
写真 18	雄山 5 号墳石室完掘状況 (西より) .....	19	写真 60	S B 0 8 柱穴断面 (北より) .....	54
写真 19	雄山 5 号墳遺物出土状況① (東より) .....	21	写真 61	S B 1 0・1 1 全景 (西より) .....	54
写真 20	雄山 5 号墳遺物出土状況② (南東より) .....	21	写真 62	S D 0 3 全景 (西より) .....	54
写真 21	雄山 6 号墳全景 (南東より) .....	22	写真 63	S D 0 3 土層断面 (西より) .....	54
写真 22	雄山 6 号墳石室完掘状況 (北西より) .....	22	写真 64	S D 1 2 全景 (北より) .....	55
写真 23	雄山 6 号墳遺物出土状況① (北西より) .....	24	写真 65	S X 0 2 全景 1 (北より) .....	55
写真 24	雄山 6 号墳遺物出土状況② (南東より) .....	24	写真 66	S X 0 2 全景 2 (東より) .....	55
写真 25	遺跡全景 VII~IX 区 .....	26	写真 67	S X 0 1 全景 (北より) .....	55
写真 26	遺跡全景 V~VII 区 .....	26	写真 68	II a 区全景 (西より) .....	56
写真 27	S H 1001 (東より) .....	30	写真 69	S T 0 2 全景 (西より) .....	56
写真 28	S H 1001 遺物出土状況 (西より) .....	30	写真 70	S T 0 2 細部 (西より) .....	56
写真 29	VII-1 区古墳時代集落 .....	31	写真 71	III 区全景 (南より) .....	61
写真 30	VII-2 区古墳時代集落 .....	31	写真 72	II 区全景 (北より) .....	61
写真 31	VII-1 区鎌倉時代掘立柱建物・溝 (東より) .....	31	写真 73	II 区 S H 0 1 .....	62
写真 32	VII-2 区 S P 1001 遺物出土状況 (北より) .....	31	写真 74	I 区 S R 0 2 全景 (北より) .....	63
写真 33	S T 1001 (南より) .....	32	写真 75	I 区 S R 0 2 遺物出土状況 .....	65
写真 34	S D 1015 遺物出土状況 (南より) .....	32	写真 76	I 区 S R 0 2 遺物出土状況 .....	65
写真 35	S D 1015 遺物出土状況 (東より) .....	32	写真 77	IV 区 S R 0 3 土層断面図 .....	67
写真 36	V-2 区全景 .....	33	写真 78	IV 区 S R 0 3 遺物出土状況 .....	67
写真 37	V-2 区全景 (南東より) .....	33	写真 79	VII 区 S X 0 1 木製品出土状況 .....	70
写真 38	I 区弥生時代 S D 0 2・0 4 土層土器出土状況 .....	37~38	写真 80	VII 区 S X 0 1 木製品出土状況 .....	70
写真 39	I 区縄文時代河川 .....	37~38	写真 81	VII 区全景 (南より) .....	71~72
写真 40	II 区縄文時代遺構面全景 .....	37~38	写真 82	VII 区全景 (南より) .....	71~72
写真 41	I b 区掘立柱建物群 (東より) .....	40	写真 83	VII 区 S H 0 1 完掘状況 .....	73
写真 42	I c 区掘立柱建物群 (西より) .....	40			

# 表 目 次

表 1	南天枝遺跡掘立柱建物一覧表 .....	49	表 2	尾端遺跡掘立柱建物一覧表 .....	58
-----	---------------------	----	-----	--------------------	----

## I. 調査の経緯と概要

平成8年度の県道事業埋蔵文化財発掘調査（県道埋蔵文化財調査業務）は、平成8年4月1日に財団法人香川県埋蔵文化財調査センターと香川県教育委員会との間で締結した「埋蔵文化財調査契約書」にもとづき実施した。今年度の調査は、坂出市川津川西遺跡、雄山古墳群、高松市兀塚遺跡、林下所遺跡、竹元遺跡、三木町南天枝遺跡、尾端遺跡、志度町原中村遺跡、大川町寺田・産宮通遺跡の9遺跡で調査を実施した。当初計画と実施では、雄山古墳群が新規の古墳の発見により若干工程の変更があったが、事なきを得た。また、尾端遺跡の平成8年度の調査対象地の一部を、用地の関係で9年度に繰り越すことも考慮されたが、幸いにも当初の予定面積の調査を終えることができた。

国道438号道路改築事業川津橋橋梁整備に伴う川津川西遺跡の調査は、1,500㎡を調査対象として、平成8年10月より12月までの2ヶ月間で実施した。この調査では縄文時代の包含層、弥生時代後期の包含層及び自然河川、古墳、平安、鎌倉時代の集落の調査を実施した。

県道高松王越坂出線道路改良工事に伴う雄山古墳群の調査は、6,328㎡を調査対象として、平成8年4月より9月までの6ヶ月間で実施した。この調査では、7基の雄山古墳群の内4基の後期古墳の調査を実施した。これらの古墳は横穴式石室導入期の古墳群で、馬具、鏡等の副葬品も豊富で、大変貴重な調査成果をあげた。なお、雄山古墳群では先の調査成果をもとに、一般県民を対象に現地説明会を開いた。

県道三木国分寺線地方特定道路整備事業に伴う兀塚遺跡の調査は、昨年度からの継続調査で、今年度は3,529㎡を調査対象として、平成8年4月より9月までの6ヶ月間で実施した。この遺跡では、古墳時代と鎌倉時代の集落の調査を実施した。なお、兀塚遺跡では未退去家屋の関係で、371㎡が次年度に調査を残すことになった。

県道塩江屋島西線道路局部改修工事に伴う竹元遺跡の調査は、453㎡を調査対象として、平成9年2月より3月までの2ヶ月間で実施した。小範囲の調査にもかかわらずこの調査では、縄文時代晩期の土坑と自然河川、弥生時代後期の良好な遺物等を検出し、貴重な成果をあげることができた。

県道高松長尾大内線道路改築事業に伴う南天枝遺跡の調査は、3,800㎡を調査対象として、平成8年4月より11月中旬までの7.5ヶ月間で実施した。調査は掘削及び仮設工事を業者に請負わせる工事請負方式で実施した。南天枝遺跡では、古墳時代末及び中世の集落の調査を実施した。住居跡の数も多く当該期の集落構成を理解するうえで貴重な成果になった。

県道高松長尾大内線地方特定道路整備事業に伴う尾端遺跡の調査は、4,200㎡を調査対象として、平成8年11月中旬より平成9年3月までの4.5ヶ月間で実施した。調査は南天枝遺跡同様工事請負方式で実施した。尾端遺跡では、古墳時代末～奈良時代の集落、近世後半の墓群等の調査を実施した。なお、尾端遺跡では未退去家屋の関係で、小範囲ながら次年度に調査を残す。

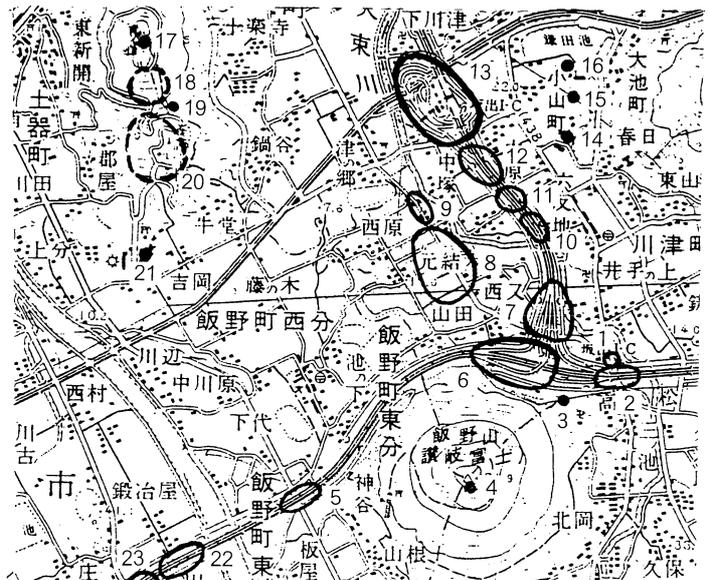
高松志度線緊急整備工事に伴う原中村遺跡の調査は、1,500㎡を調査対象として、平成8年4月より6月までの3ヶ月間で実施した。原中村遺跡では弥生時代後期の小規模な集落及び自然河川中より良好な遺物包含層を検出している。

県道富田西志度線緊急地方道路整備事業に伴う寺田・産宮通遺跡の調査は、昨年度からの継続調査で、今年度は1,544㎡を調査対象として、平成8年4月より6月までの3ヶ月間で実施した。この遺跡の調査では、昨年度調査区より続く弥生時代中期の集落及び中世の遺構・遺物を検出した。

## II. 川津川西遺跡

### 1. 遺跡の立地と環境

川津川西遺跡は飯野山と旧鵜多郡を北流する大東川の間であり、この大東川によって開析された西岸の段丘上に位置する。本遺跡の所在する坂出市川津は濃密な遺跡分布を示す。近年、四国横断自動車道建設に伴い、数多くの遺跡が調査されてきた。最も時間を遡ることができる資料は近接して本遺跡の南西に位置する東山田遺跡で二次堆積ではあるが旧石器が確認されている。縄文時代では四国横断自動車道建設に伴う川津川西遺跡調査時に晩期凸帯文の包含層を確認しており、本遺跡周辺での集落の存在を想定できる。弥生時代では前期前半、後期から終末を代表する下川津遺跡、弥生中期・後期の集落である川津一ノ又遺跡。古墳時代から古代にかけての前述した下川津遺跡。中世では川津元結木遺跡など連綿と集落が営まれて現在に至っている。

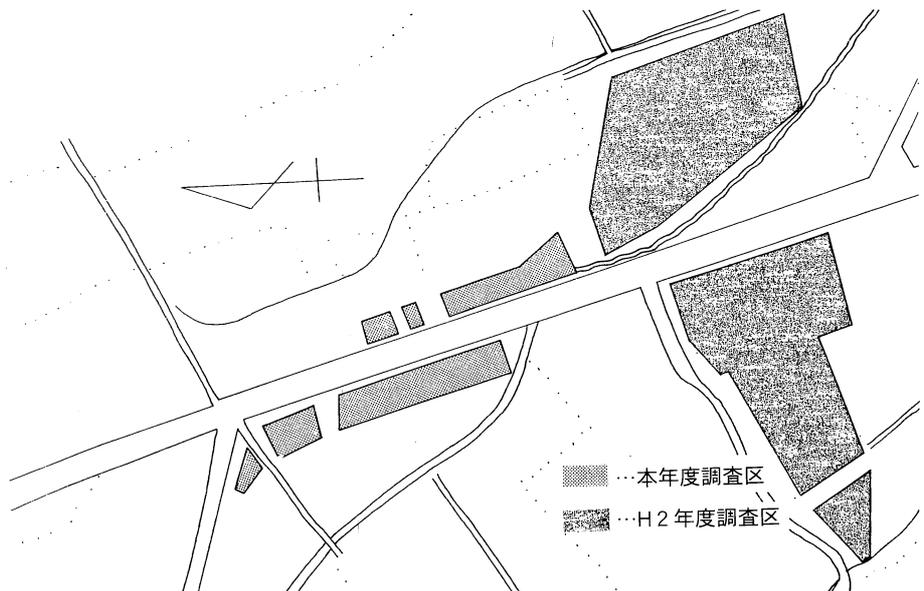


- |             |            |              |
|-------------|------------|--------------|
| 1 川津川西遺跡    | 9 川津元結木遺跡  | 17 青ノ山山頂古墳   |
| 2 川津川西遺跡    | 10 川津二代取遺跡 | 18 青ノ山古墳群    |
| 3 三ノ池古墳     | 11 川津下樋遺跡  | 19 青ノ山墓地公園古墳 |
| 4 飯野山頂遺跡    | 12 川津中塚遺跡  | 20 青ノ山築跡群    |
| 5 飯野・東二瓦礫遺跡 | 13 下川津遺跡   | 21 吉岡神社古墳    |
| 6 川津東山田遺跡   | 14 連尺茶臼山古墳 | 22 川西北・鍛冶屋遺跡 |
| 7 川津一ノ又遺跡   | 15 川津茶臼山古墳 | 23 川西北・七条Ⅱ遺跡 |
| 8 川津西又遺跡    | 16 小山古墳    |              |

第1図 遺跡の位置及び周辺の遺跡 (S = 1 / 25, 000)

### 2. 調査成果の概要

平成2年度の四国横断自動車道建設に伴う川津川西遺跡1次調査地（以下1次調査と記す）の北側にあたる部分を本年度調査を行った。従って、1次調査地との対応関係を把握するため、1次調査時の地区割名称であるE, W区をそれぞれI区からⅢ区に変更し、2次調査である本年度はⅣ区から始めてⅥ区までとして調査を進めて行くこととした。（第2図参照。）



第2図 既往の調査区と今回の調査区区割り図

### (1) 縄文時代

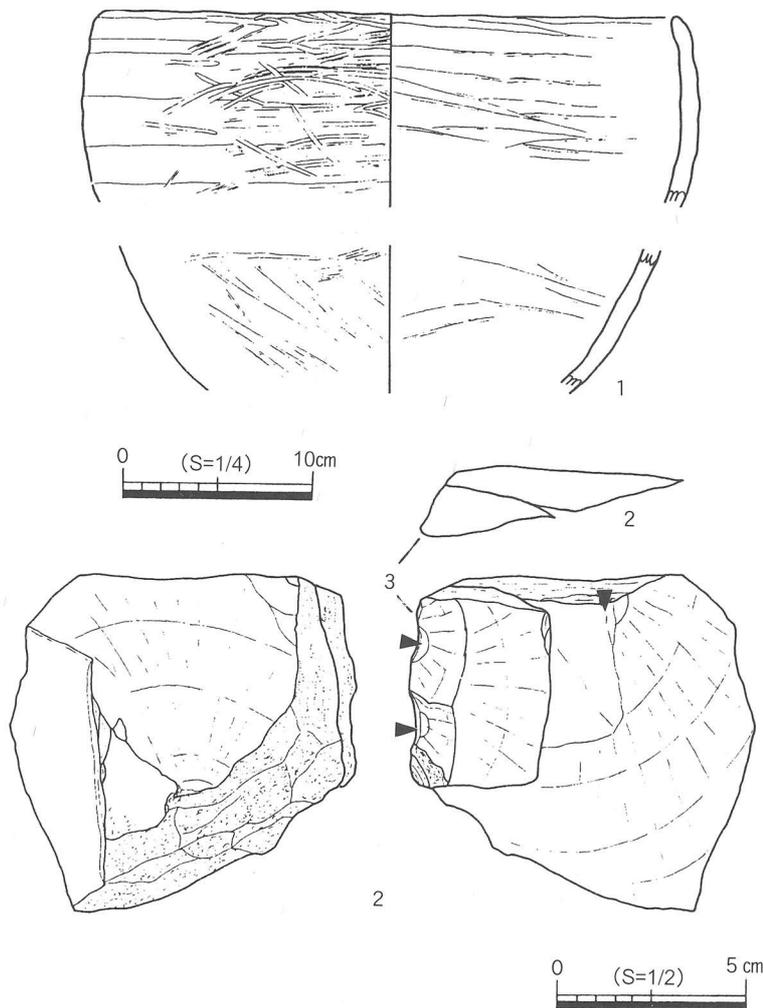
包含層を確認している。この包含層は明灰色砂質土と褐灰色砂質土から成る。1次調査時にも確認されており、本遺跡一帯に広がる事が確認された。各層ともラミナ状堆積を示し、周辺に同時期の遺構・遺跡の存在を暗示させるものである。おもにV区、VI区において確認された。1次調査時よりも遺物量は希薄であり、コンテナ1箱程の量であったことから、想定される集落は本遺跡の南西方向である公算が高い。

1は浅鉢の口縁部と胴部片である。外面は植物質の繊維を束ねたような原体による縦方向の細密条痕を施した後、ナデ。そして上半部にはやや散漫なヨコミガキを行う。内面はすべて板ナデ状の横方向のナデを施している。縄文後期前葉に比定される。2は石核、3は2の石核から作り出されたサヌカイトの剥片で接合関係をもっている。2の分割面の上方から打撃を加えて、3の剥片を作りだしている。さらに3は背面に打撃を加えているが打点は失われている。

### (2) 弥生時代

SR01

V区、VI-2区において検出している。西側の肩部を検出していないので川幅は不明であるが、深さは2.5m程の本遺跡の南西方向から現在の大東川へ向かって北流する自然河川であると思われる。下層の砂礫層からは弥生時代後期後半の土器を少量確認している。上層からは6世紀末～7世紀前半の須恵器を確認しており、一端、川の機能が停止したのち、落ち込み状の地形となっていたことが想定される。また、下層には厚さ20cm～30cm程の厚さで茶褐色を呈し、多くの動・植物遺存体を包含する腐食土層<sup>(1)</sup>を確認した。この腐食土層からは、植物遺体ではドングリが大量に確認され、動物遺体ではガムシ、セマルガムシ、クロゲンゴロウ、ヒメゲンゴロウ、コガネムシ、巻き貝などが確認されてい



第3図 縄文包含層出土遺物実測図

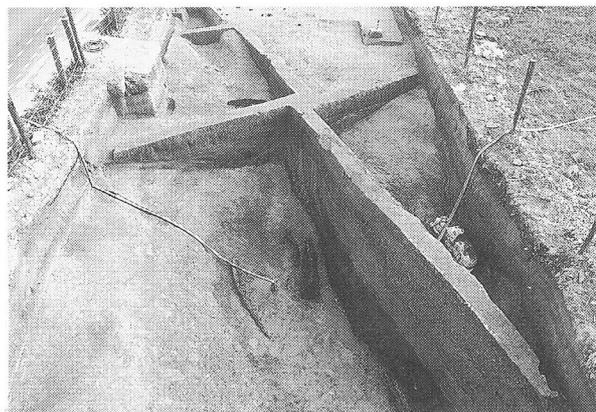


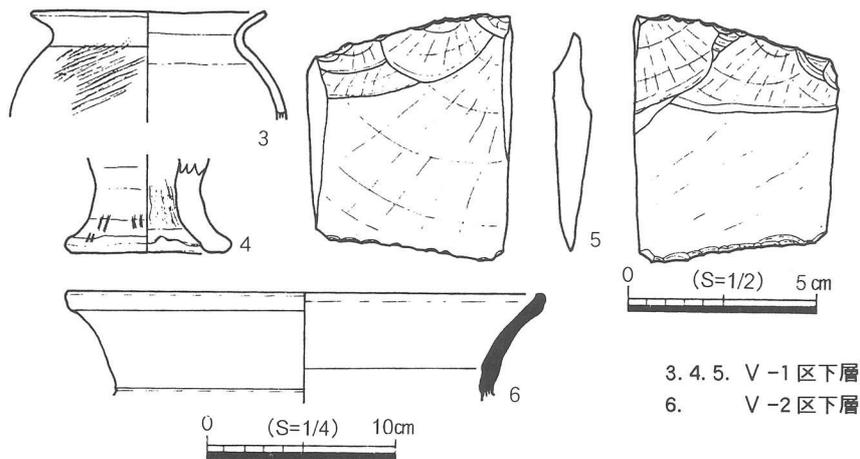
写真1 SR01 完掘状況（北から）

る。コガネムシや大量のドングリから、弥生時代後期のこの辺りは広葉樹林に覆われていた可能性が指摘できる。IV-1区からIV-2区にかけての段丘間の低地部の最下層からも多量の弥生後期前半の土器と共にサヌカイト剥片が確認された。

4は甕の口縁部である。外面に右上がりの螺旋状のタタキを施している。弥生時代後期後半に比定される。5は土製支脚である。6はサヌカイト製のスクレイパーである。7は須恵器の大甕の口縁部である。7世紀に比定される。

このSR01の上層において水田跡の可能性を考慮し、畦などの検出に努めたが、確認できなかった。

また断面観察においても同様の結果となった。



第4図 SR01出土遺物実測図

壁面で土壌サンプルの採取を行っているので本報告時に結果を報告することにする。

### (3) 古墳時代後期

#### SD10・11

IV-2区の低地部の最下層の弥生後期包含層を切り込む形で東西に流れる2条の溝を検出している。SD10は幅1.5m、深さ0.3m、SD11は幅1.6m、深さ0.25mの断面逆台形を呈する。出土遺物から古墳時代後期～終末にかけて機能していたのであろう。

#### SH01

V-2区の東部分で検出した。調査対象範囲外の道路部分へさらに、東にSH01は延びると予想されることから、南北軸が3.8m(東西規模不明)の方形の4本支柱穴の竪穴住居と考えられる。深さは検出面より0.3m程を測る。壁溝は全周するものと思われる。支柱穴は2基確認し、深さは0.25m～0.3m程でありやや浅く、間隔は南北間で約1.9mである。床面は南西部分の一部にしか残存していなかった。

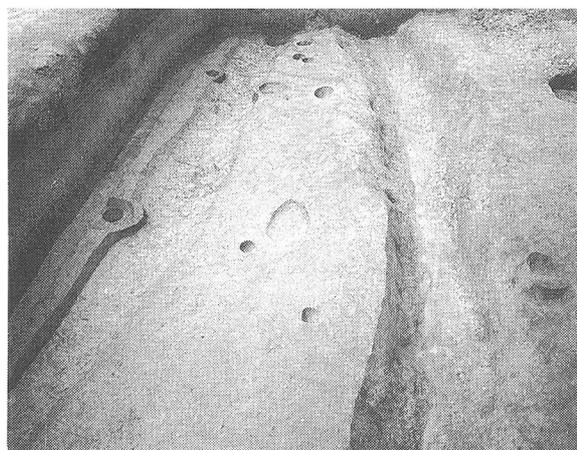
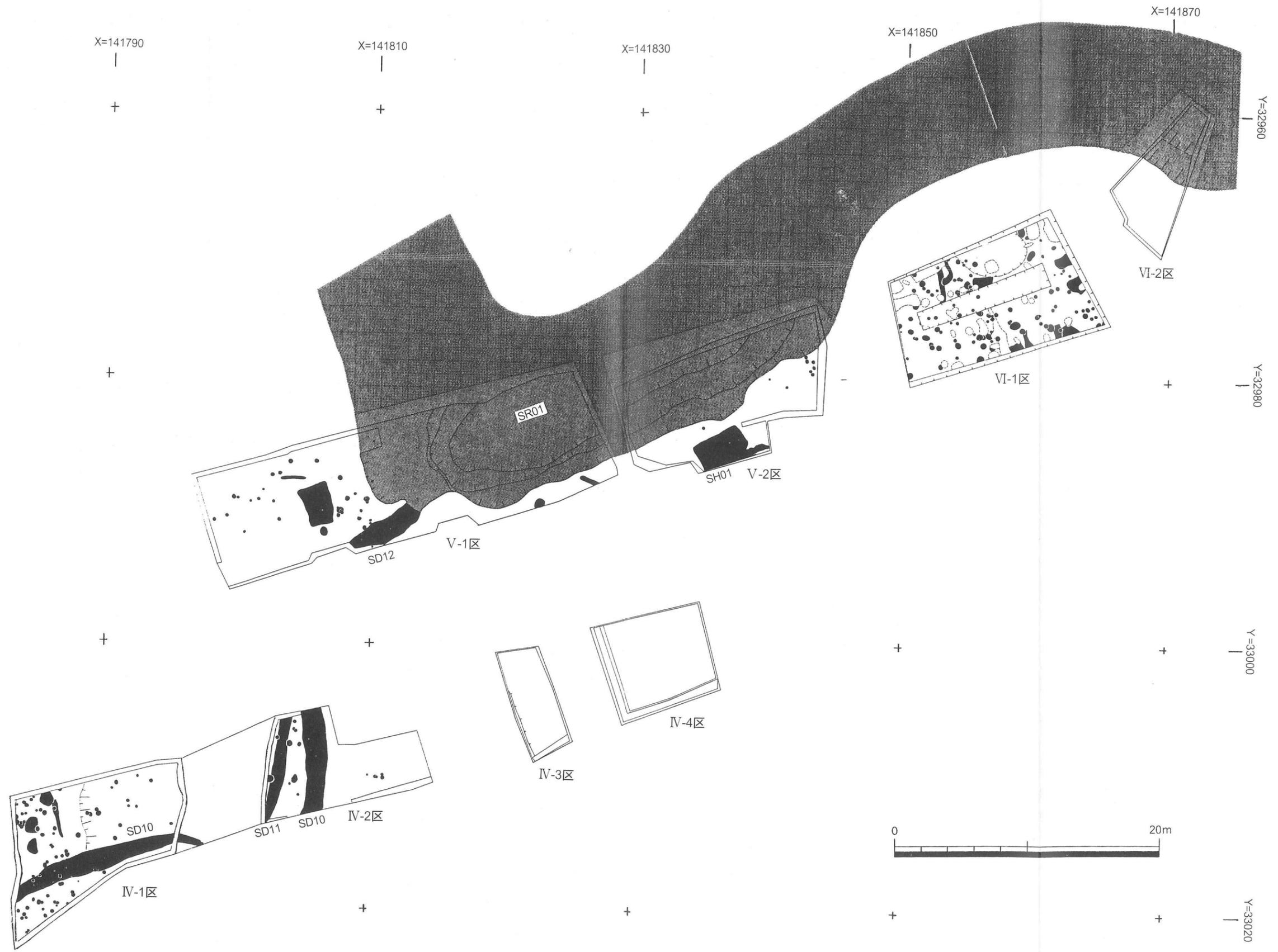


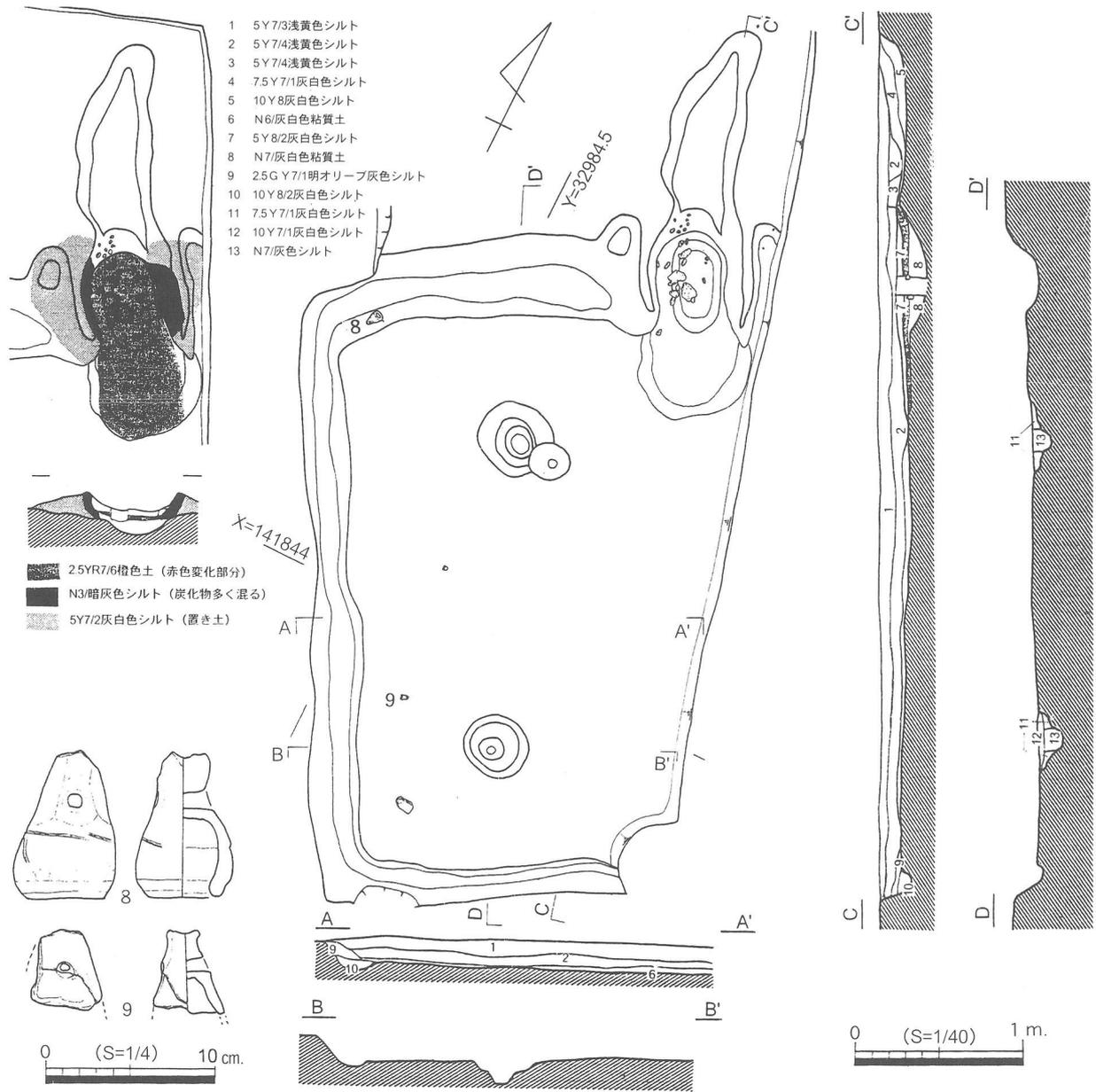
写真2 SD10・11完掘状況(東から)

竈の構築方法はまず煙道部と燃焼部のベース面を掘り込んだ後、置き土をして側壁を造り出している。また、燃焼部には土師器の小片と焼土塊が、竈正面の床部分には掻き出しによる炭化物層が認められる。この焼土塊は天井部か側壁の置土の赤変した部分の可能性もある。出土遺物として二次堆積土中より須恵器片が、北東隅の壁溝部分と南西部分床面直上でイダコ壺を確認している。所属時期は概ね7世紀代に属すると思われる。

1次調査時にも古墳時代後期の竪穴住居が2棟が検出されている。しかし、川津川西遺跡全体で同時期の住居の広がり確認されない為、1次調査の住居跡とともに小規模な集落の可能性が高いだろう。



第5図 川津川西遺跡 遺構分布図 (古墳時代終末~古代)



レベルはすべて10,400m

第6図 SH01 平面図及び出土遺物実測図

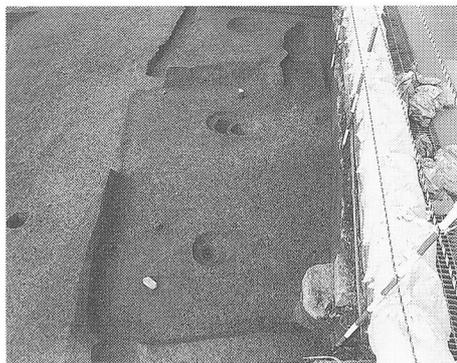


写真3 V-2区SH01完掘状況

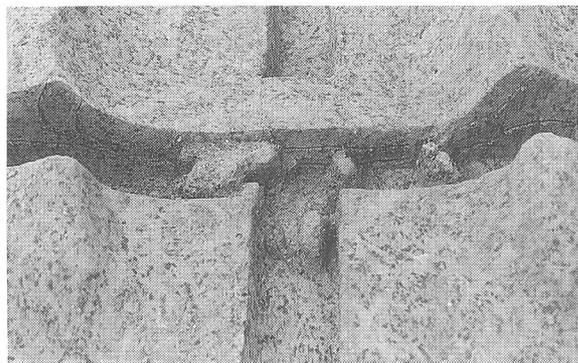


写真4 SH01 竈断ち割り断面 (南から)

(4) 古 代

SK21

VI-1区ではおもに9世紀代の遺構を検出している。SK21は方形の直径1.2m幅0.5m深さ0.3mの土坑である。出土遺物としては長胴甕・須恵器杯・土師器碗などがある。10・11は長胴甕で外面を濃密なタテハケを施し、内面は口縁内面をヨコハケを施した後、ヨコナデを行っている。13・16の底部はともにヘラ切りである。

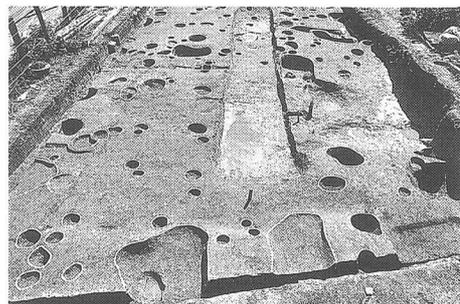
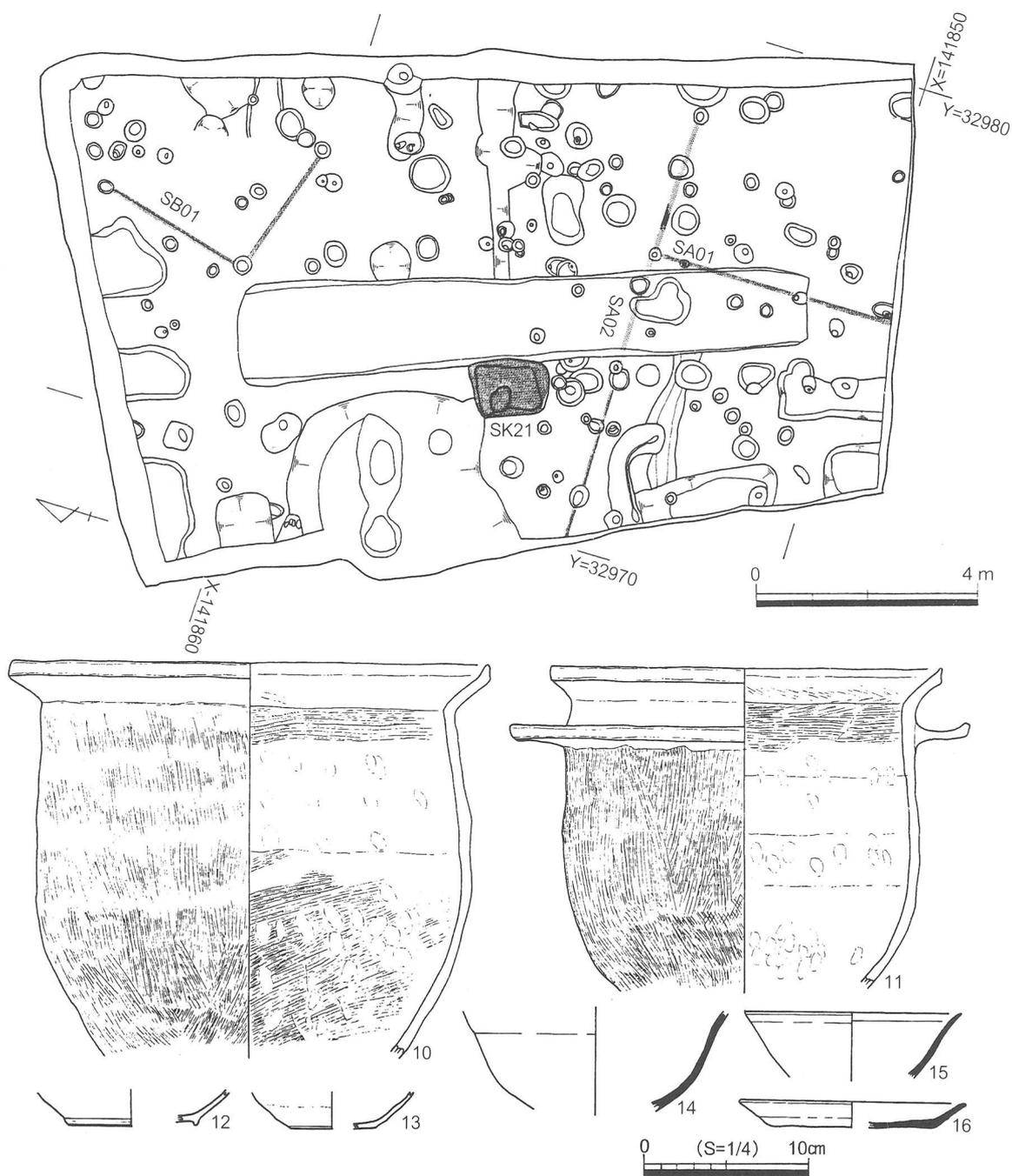


写真5 VI-1区 完掘状況(北から)

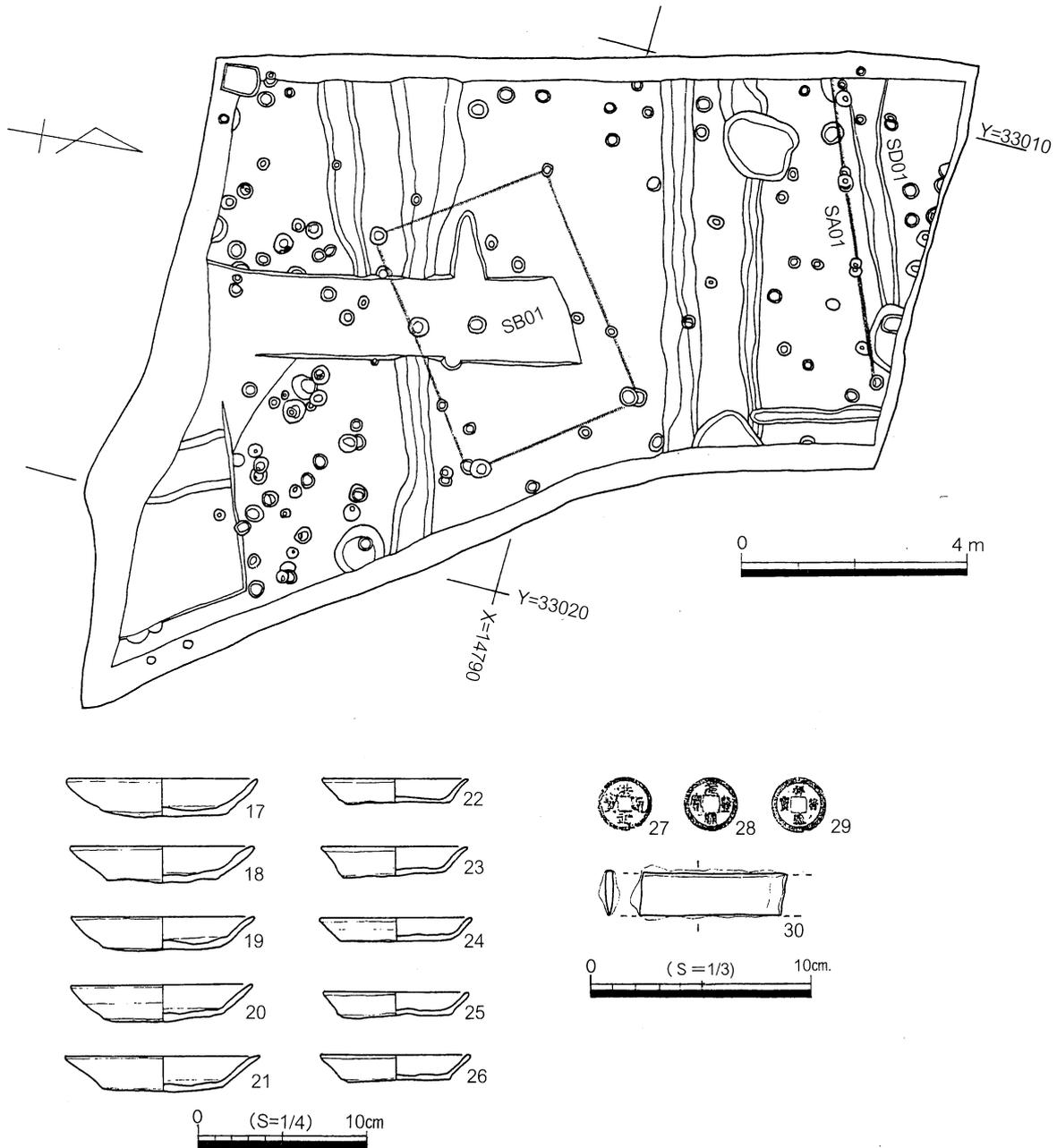


第7図 VI-1区平面図及びSK21出土遺物実測図

(5) 中 世

S B01

IV-1区では主に1次調査時のI区において検出した14世紀代の集落の北限にあたる部分を確認した。中でもS B01は梁間1間×桁行2間(3.2×4.4m)の掘立柱建物である。このS B01が廃絶する時にS B01を構成する北東隅のS P30を切る形でS P29が掘られている。このS P29・30からは14世紀代に比定される土師器杯が5点、小皿が5点、洪武通寶、祥符通寶、元豊通寶、永樂通寶がそれぞれ1枚出土した。土師器はいずれも完形で単なる柱穴に廃棄されたものとは考えにくい。また、S P29・30のみ遺物が出土しており、S B01を構成する柱穴の中でも北東の方向に位置する柱穴を意識していると思われる。以上の点からもこのS P29・30はおそらく地鎮の性格をもつと思われる。また、S D01に沿ってS A01の柵列なども見られることから屋敷溝のような区画は持たないものの、14世紀代の集落の北限と考



第8図 IV-1区 第一面遺構面平面図とS B01出土遺物実測図

えられる。

### 3. まとめ

縄文時代では1次調査時の晩期凸帯文期の包含層の年代が後期前葉まで遡ることが判明した。また遺物量が1次調査時に

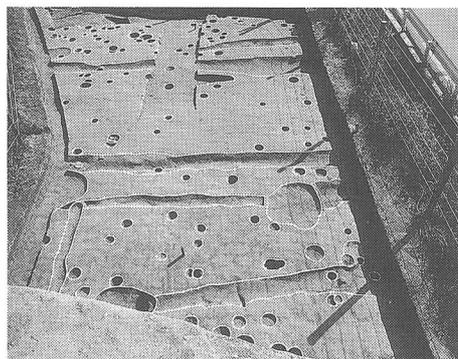


写真6 IV-1区 第1面完掘状況  
(北から)

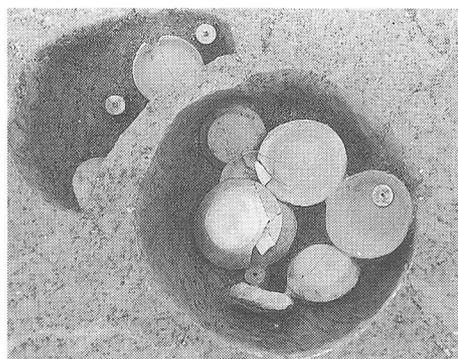


写真7 IV-1区 S P 29・30  
遺物出土状況(西から)

比べて希薄であることから現在の四国横断自動車道より南の段丘に縄文時代の遺跡が存在する可能性が高くなった。弥生時代では後期の包含層と自然河川のみで集落を想定させる遺構は確認されなかった。古墳時代ではV-2区において1次調査時に続いて後期から終末にかけての時期が想定される住居跡を1棟確認した。1次調査時の古墳時代住居跡からはやや北に離れており間に同時期の集落を示す遺構が存在しないことから、それぞれ別の小規模な単位の集落の可能性が高い。古代ではVI-1区において9世紀末頃の集落を確認した。これも1次調査地よりも若干、北に離れており、別の集落の可能性が高い。なかでもS K 21出土遺物は良好な一括資料と言えるであろう。中世では1次調査時の14世紀代の集落の北限を確認した。明確な集落の区画は確認できなかったが方向性を持つ溝や柵列等が存在することや、IV-2区から北側は同時期の遺構・遺物が確認されないことからIV-2区付近を集落の北限と考えてよいだろう。S B 01を構成するS P 29・30からは土師器の杯、小皿がそれぞれ5点、銭貨が4枚、刀子が1点確認された。1次調査時のI区においても同時期の土師器と銭貨が柱穴より確認されており、今後川津川西遺跡の集落における地鎮と思われる行為の復元なども課題となる。また、現地地形からは判断することができない隠れた段丘面を確認することができた。この段丘面はIV-2区からVI区にかけて西から東へ延びる。1次調査においてもI区南側で確認されており、この段丘間では複数の遺構面が確認された。今後はこのような旧地形の復元も課題として残ると言えるだろう。

### 註

(1) 仏生山小学校高橋芳樹氏に鑑定していただいた。記して感謝します。

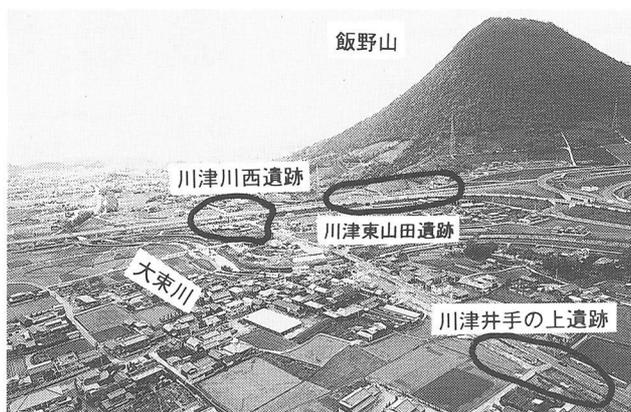


写真8 川津川西遺跡遠景 (北から)

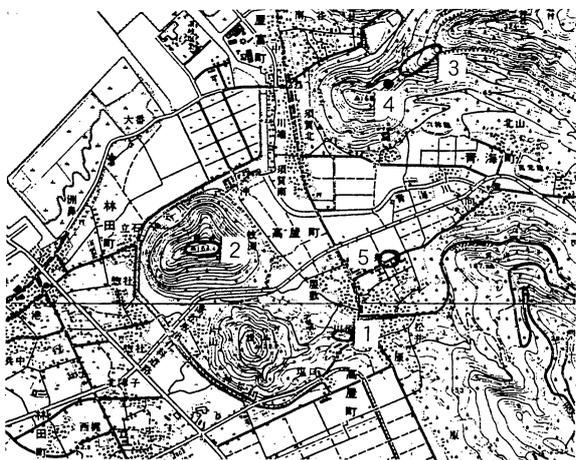
### Ⅲ. 雄山古墳群

#### 1. 遺跡の立地と環境

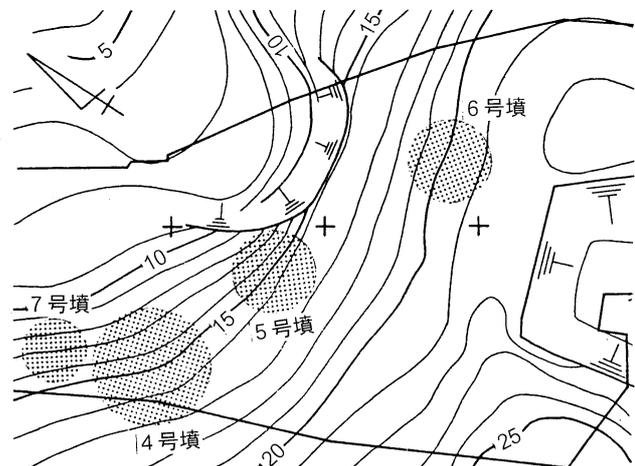
雄山は坂出市高屋町にあり、東方に白峰山などの五色台を望み、南・西方には綾川下流の沖積平野が広がる。北方には瀬戸内海の展望が開け、高屋の町も北東方向に一望できる。

周辺の遺跡としては、すぐ北の雌山山頂に雌山古墳群(2)が対峙するほか、五色台北峰から西にのびる山稜の末端に、すべり山古墳群(3)、経ノ田尾古墳(4)が存在する。また眼下の高屋町にも弥生時代後期の集落である高屋遺跡(5)が確認されている。雌山古墳群は3基からなり、全て安山岩を使った積石塚である。1号墳は方墳で竪穴式石槨を持ち、2・3号墳は円墳で埋葬施設は不明であるが、3号墳には竪穴式石槨の天井石と見なされる石が2個散乱している。いずれも古墳時代前期に属すると考えられている。すべり山古墳群は3基からなり、雌山と同じく、全て安山岩の積石塚である。1・3号墳は円墳であり、埋葬施設は不明である。2号墳は方墳であり、大小2基の竪穴式石槨が構築されている。古墳時代前期に属すると考えられている。尾根西方下に位置する経ノ田尾古墳は昭和40年頃の開墾によって消滅し、現在その痕跡も認められないが、伝えによれば前方後円墳、または円墳であり、竪穴式石槨を持っていたとされる。すべり山古墳群とともに積石塚古墳群を形成するところから古墳時代前期に属すると考えられている。

周囲の古墳が古墳時代前期に属するという中で、雄山から北東にのびる尾根の北斜面に、古墳時代後期に属する雄山古墳群(1)がある。このうち1～4号墳は周知の古墳であったが、予備調査によって新たに5～7号の3基の古墳を確認した。調査対象は4～7号墳であり、標高13m～20mの間にその4基が所在している。4・5号墳は斜面とテラス面にかけての傾斜変換点付近に存在し、5号墳は4号墳の東南約40mに位置する。6号墳は5号墳からさらに東南50mで尾根頂部から少し下がった所に位置し、雄山古墳群の中では最も標高が高い。7号墳は4号墳の北で墳丘の裾部を接するようになり、丘陵のテラス面に位置している。1～6号墳はほぼ一列に並んで位置し、7号墳はそれに直交するように位置していることが特徴的であり、そのことから計画的に配置されたことがうかがえる。



第9図 周辺遺跡分布図



第10図 古墳分布状況図

## 2. 調査成果の概要

### (1) 雄山7号墳

#### ① 墳丘

雄山から東に延びる尾根から舌状に北西に派生する尾根の東斜面に立地する。墳丘は後世の地形改変により大幅な削平を受け、現地形からは古墳が存在するとは想定できなかった。

墳丘の大部分はすでに失われており、周濠の規模などから推測すると径約5.8m、現状での墳高（墳頂部と北西側墳丘裾部との比高差）は約0.39mを測る円墳である。墳丘は旧地形の整形土の上に浅黄色土の単一層の盛土が行われている。盛土は突き固めた様子はなく、やや軟質である。

周濠は北および西側は明確に掘り込み、北側では幅0.61m、深さ0.36mを測るが、南側（4号墳との間）は浅く窪む程度で明確な周濠は確認できない。なお、墳丘の南側は前述の地形改変のため大幅に削り取られている。

#### ② 埋葬施設

主軸をN-24°-Wにとる横穴式石室が墳丘ほぼ中央に構築されている。開口方位も主軸とほぼ同様である。石室は基底石と部分的に2~3石を残し上部は削平を受け、すでに失われている。平面プランは右片袖式で、規模は全長2.82m、玄室長2.54m、玄室中央幅0.73m、奥壁幅0.93m、玄門部幅0.46m（推定）を測る。袖部は東側壁から0.17mほど内側に突出させたもので、玄門立柱石は用いていない。石室の使用石材は0.3m~0.5mの安山岩塊石を主に用いている。また、袖石と西側壁には羨道は連結せず、墓壙掘り込み時にすでに存在したと考えられる素掘りの溝状の墓道がみられる。墓道床面と玄室床面には段差は確認できないが、やや墓道がレベル的に高い。墓壙は長軸約3.65m、短軸約1.35mの長方形の掘り方で、北側に墓道を有する。閉塞は玄門部で行われており、塊石を1石のみ検出している。

玄室床面では棺台にあたる石材を検出しており、ほぼ石室中央に棺を配置していたと考えられる。棺台の石材の高さはほぼ水平であるが、やや南側が高い。

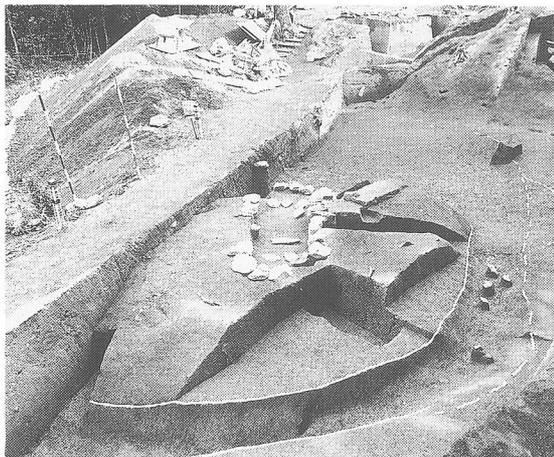


写真9 雄山7号墳全景（北より）

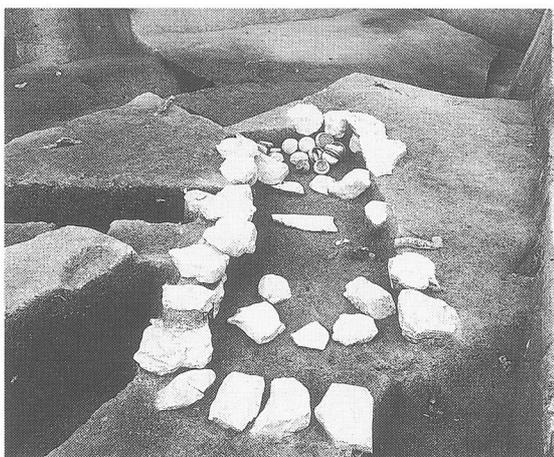


写真10 雄山7号墳石室全景（南より）

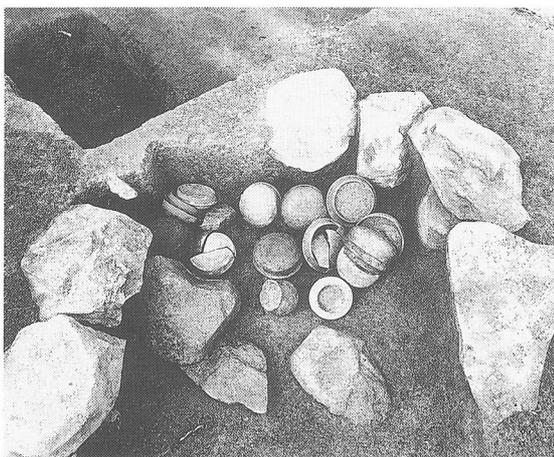
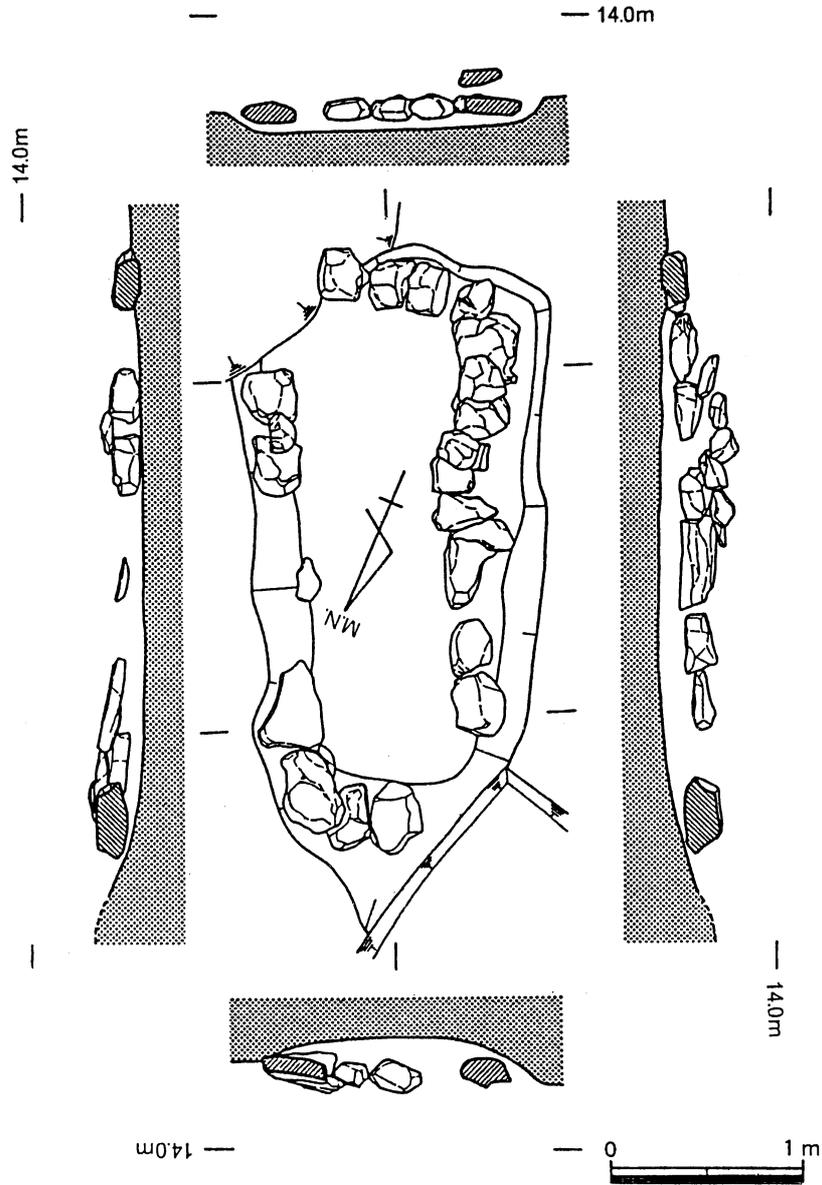


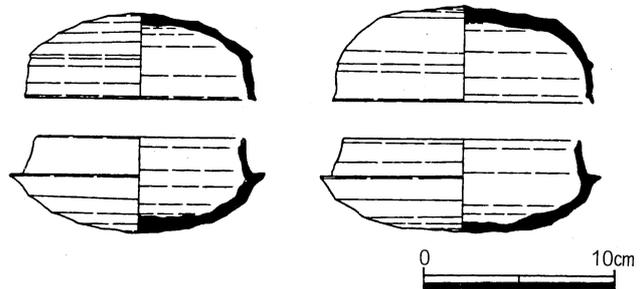
写真11 雄山7号墳遺物出土状況（南より）



第11図 雄山7号墳石室実測図

③ 出土遺物

石室は削平のため遺存する玄室内にも攪乱土が混入していたが、ほぼ原位置を保った遺物が出土している。玄室の北隅(玄室内玄門部側)の棺外に須恵器・土師器がまとめて置かれていた。杯の身と蓋のセットが6組、杯身4点、杯蓋4点、短頸壺2点、土師器甕が1点みられる。これらの土器の配置には規則性は確認できず、後述する3型式にわたる須恵器が混在している。棺台石材の位置関係から棺内と推定できる玄室中央部やや東側からは鉄鏃3点、刀子1点が出土している。



第12図 雄山7号墳出土土器実測図

また、墳丘北西側の周溝埋土最上層から馬形埴輪が出土しているが、混入の可能性

が高く7号墳に伴う遺物とは判断できない。

#### ④ 小 結

石室上部の大半が失われていたにもかかわらず、玄室床面での遺物の出土状況はきわめて良好であった。棺台の存在から棺外遺物である土器と棺内遺物の鉄製品といった副葬品の位置関係が明確に把握できた。

玄室からの出土遺物は田辺編年のTK47型式からMT15型式・TK10型式の3型式にわたる須恵器が出土している。墓道埋土観察では掘り直し・埋め戻しの形跡はなく追葬は認められないため、TK47型式に属する須恵器は伝世したもので、MT15型式とTK10型式が共伴する時期が古墳築造時期に比定できる。後述する5・6号墳とほぼ同時期に築造されたと考えられる。

#### (2) 雄山4号墳

##### ① 墳 丘

雄山から東に延びる尾根からさらに北西に別尾根が派生し、その付根に立地する。今回調査を行った4基の古墳のなかでは墳丘・石室共に遺存状態が最も良好で、墳丘北側では推定墳裾ラインが明確に確認できる。南側は後世の大幅な地形改変により墳頂部の高さに平坦に揃えられていたため、墳丘は地中に埋没していると想定できた。

現状での古墳の規模は直径約10.1m、北側墳丘基底部と墳頂部の比高差（墳高）は約3.0mを測り、部分的に削平を受けているが墳形は円形をとどめている。尾根頂部寄りには周濠を巡らせており、周濠内には墳丘盛土の一部がかなり流出して堆積している。

墳丘は築造以前の旧地形の整形土と盛土から成る。盛土は石室構築と並行して行った盛土と、天井石構築後に石室全体および墓道を被覆しつつ、墳形を形造った盛土との二工程確認できる。第一の盛土は各層が5cmから40cm前後の厚さで、堅く叩きしめられた様子はなく軟弱なものである。第二の盛土はにぶい黄橙色土の単一層で、非常にしまりが悪く版築工法を用いたとは考え難い。

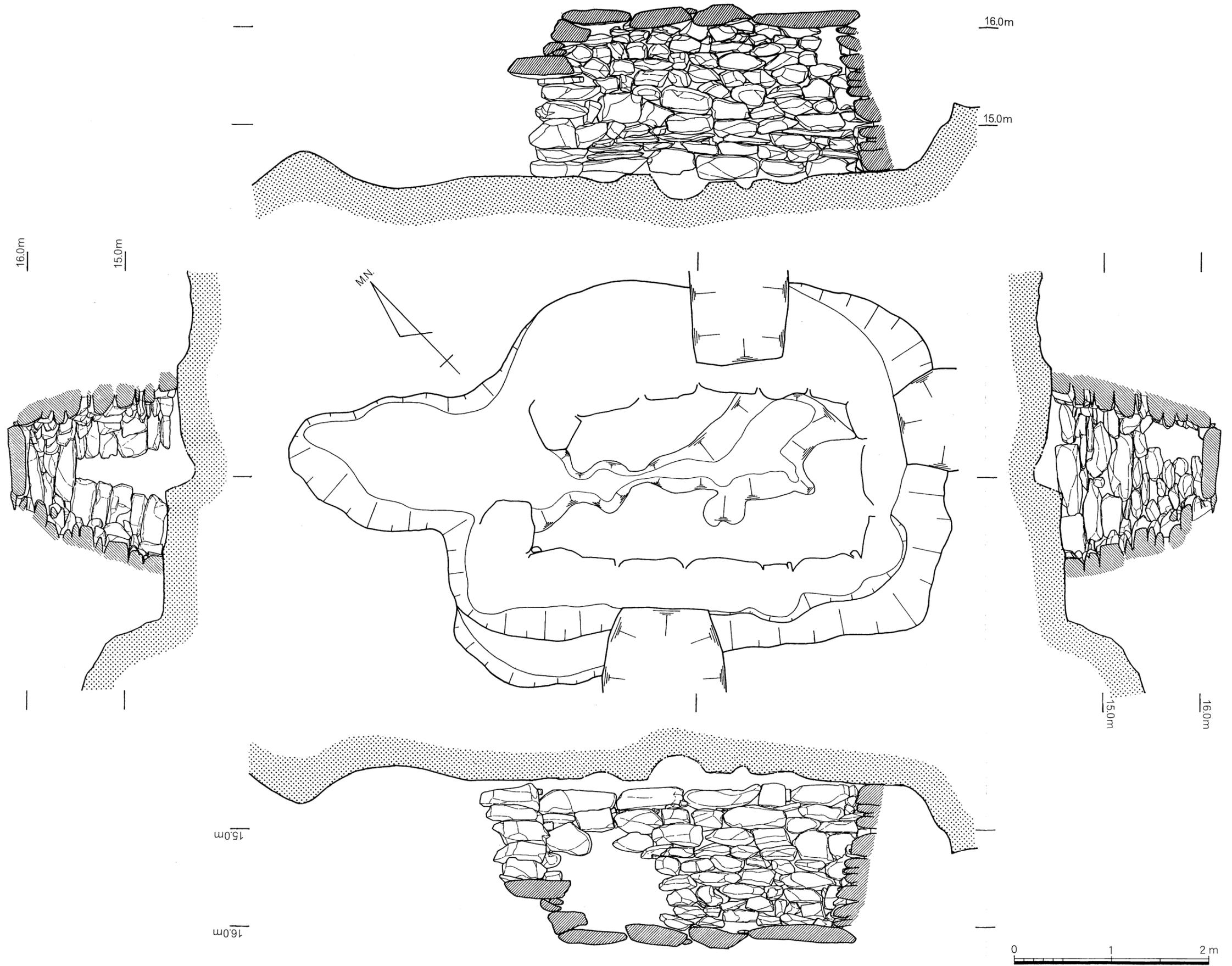
##### ② 埋葬施設

墳丘中央やや北東よりに1基の横穴式石室が築造されている。主軸を概ねN-45°-Wにとり周辺等高線に平行した方向に主軸を持つが、開口方位はN-7°-Wとやや異なる。平面プランは歪な両袖式で前壁を有する。袖石には羨道が連結せずに溝状を呈する素掘りの墓道が連結している。石室規模は全長3.36m、玄室長3.23m、玄室奥壁幅1.56m、中央幅1.68m、玄門部幅0.57m、玄室高1.5m（主軸上、奥壁から0.5mの位置）、玄門部高1.05mを測る。壁体構造は、南西側壁において基底石を含め3段は横長の石材を横積みし、それより上方はやや小形の石材を緩く持ち送りながら小口積みしているという変化がみられる。奥壁の隅角には両壁に跨る石材もみられる。袖石は南西側側壁から0.5m、北東側側壁から0.4mほど内側に突出させており厚さ20cm前後の板状石材を数段横積みしている。前壁は左右袖石最上段に板状安山岩を構築して前壁最下段とし、これを含め3段で構成されている。



写真12 雄山4号墳墳丘全景（北西より）

天井石は4枚の大形板状石材を構築した平天



第13図 雄山4号墳石室実測図

井で、石材の間隙を小形の塊石を用いて塞ぎ、盛土の混入を防いでいる。

石室石材には安山岩が主に用いられ、花崗岩も若干量であるが含まれる。なお、天井石および閉塞石を除く各壁面の内側には赤色顔料の痕跡が確認でき、石室内面に塗布していた可能性が高い。

床面は盗掘による攪乱が多く見られるが、安定した床面の状況から墓壙の底面に貼床・敷石などを施さずに床面としていたと考えられる。

閉塞は玄門部で行われ、2列で控え積みを行わずに7段の塊石を積み上げた閉塞石が確認できた。使用石材は下部には0.5mほどの横長の石材を小口積みし、上部に上がるに従い小形の塊石を使用している。最上部では0.2mほどの石材を用いている。

墓壙は北東に傾斜する旧地表面に若干の盛土を行う程度で、かつ底面がほぼ水平になるように掘り込んでいる。そのため尾根頂部側の南西側は深さが0.8mあるが、北東側は深さを持たず、断面がL字形になる。規模は長軸5.0m、短軸3.8mを測り、北西側に墓道を有する。この墓壙掘り方の構造が前述した石室壁面の石材の大きさ・積み方の変化に呼応する。南西側壁では墓壙内に裏込めを行ないながら石室下部を構築し、それより上部は墓壙より上になるため石室構築と墳丘盛土を並行して行っている（前述した第一の盛土）。この工程の変化が石室壁面の構造にも影響を与えている。一方、北東側壁では、墓壙は深さをほとんど持たないため、基底石から第一の盛土を行いながら構築しているため、基底石近くから持ち送りが確認できる。また、玄室の各基底石を据え置くための掘り方は確認できず、墓壙底面に直接基底石を設置している。

墓道は墓壙掘り込み時に同時に掘り込まれていると考えられ、玄室床面と墓道床面はほぼ水平で、段差もみとめられない。墓道の埋土観察では掘り直し・埋め戻しの形跡は確認できず、さらに第二の盛土により石室・墓道は被覆されており、その掘り直し等もみられないため追葬は考えられない。墓道は埋葬終了後直ぐに埋め戻されたと考えられる。

### ③ 遺物

玄室からは須恵器片、馬具（銜の一部・f字形鏡板片）、鉄鏃片、玉類（ガラス小玉22・管玉6・土玉1）が出土している。いずれも原位置を保つ遺物ではなく、攪乱層に浮いた状態で検出している。須恵器は細片であるため図化に耐えないが、3方方形透かしの高坏脚部、高坏口縁部、稜がかすかに残る杯蓋がみられる。

周濠からは円筒埴輪片多数、形象埴輪片（人物埴輪等）、ノミ状鉄器1、須恵器が出土している。須恵器は杯身と甕の破片が出土している。甕のなかにはTK23型式まで遡る可能性のあるものも出土している。円筒埴輪は埴質と須恵質の2種類が確認できる。いずれも外面はタテハケ・ナナメハケのみで2次調整は施されていない。埴質円筒埴輪の一部の底部外面には板状工具によるタタキ調整が確認でき、須恵質円筒埴輪の一部には最下段のタガに断続ナデがみられる。内面は指頭圧及びナナメ指頭ナデが施されている。これらの円筒埴輪は概ね川西編年のV期に該当する。人物埴輪は墳裾よりやや上方の墳丘斜面において、頭部を下に向け転倒した状態で検出された。頭部・右肩部・手などを欠いており全体



写真13 雄山4号墳玄門部と閉塞石（南東より）

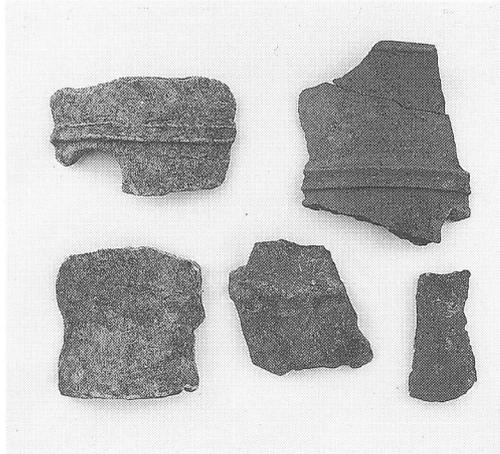


写真14 雄山4号墳周濠出土円筒埴輪(表)

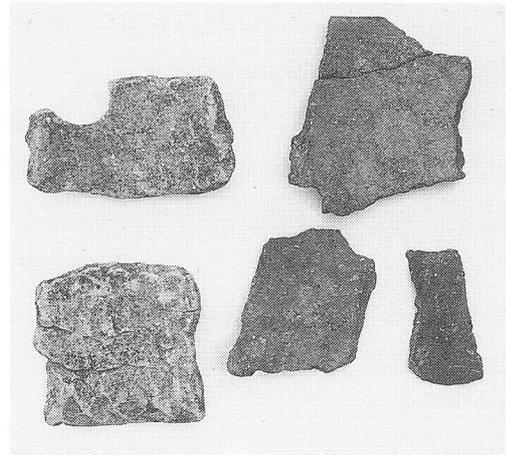


写真15 雄山4号墳周濠出土円筒埴輪(裏)

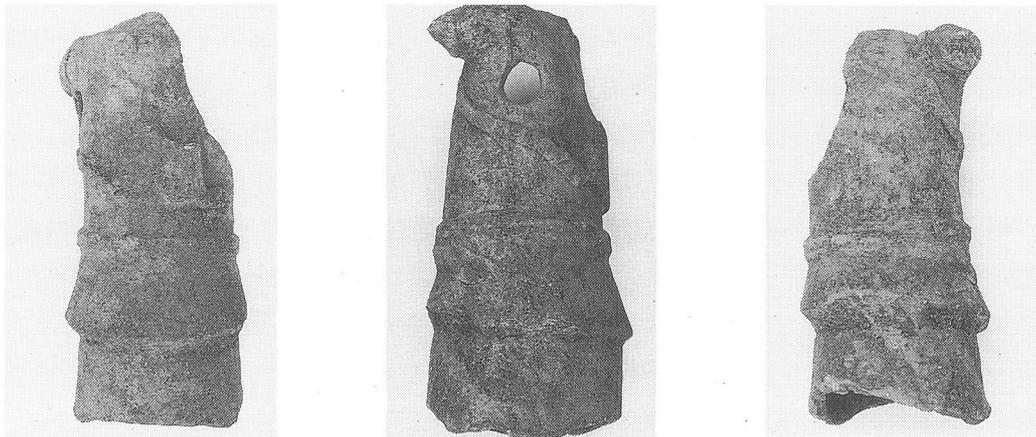


写真16 雄山4号墳出土人物埴輪

像は明らかでないが、襷状のものを肩にかけ、鞆のようなものを背負っている。これらの埴輪を据えた痕跡は一切みられず、人物埴輪の出土状況などからみて、元来墳丘に樹立していたものが周濠に転落したと考えられる。

#### ④ 小 結

4号墳は墳丘・石室共に遺存状況が良好で、両者の築造・構築関係をほぼ明らかにする事ができた。その築造・構築手順は、(一部に盛土)→墓壙掘り込み→石室下部構築→石室上部構築・第一の盛土→天井石構築→埋葬→第二の盛土と復元できる。また、4号墳の石室は羨道を持たずに、代わりに墓壙に連結する墓道を持つ事が最大の特徴である。竪穴系横口式石室のイデオロギーを取り入れながらも、前壁を有し、平天井、塊石による閉塞といった畿内系の石室の要素も受け入れており、現時点では北九州と畿内の折衷式の横穴式石室と考えている。

なお、今回調査した古墳のなかでは唯一埴輪を伴っている点も特徴といえる。

残念ながら盗掘により、石室からの副葬品の出土は稀薄であったが、玄室内出土遺物、周溝出土遺物、石室形態から7号墳および後述する5・6号墳とほぼ並行するか、やや下の時期に比定できる。

### (3) 雄山5号墳

尾根の頂部からやや下がった斜面上に築かれた円墳で、現地地形では古墳の存在は全く想定できなかったが、予備調査によって確認した古墳である。尾根頂部寄りに周濠の一部と石室が遺存している。墳丘と石室の上半部および古墳の北半分は後世の整地によって失われているが、周濠の規模からみると、墳丘の直径は約8m程度と推定される。わずかに残存していた墳丘の盛り土は比較的柔らかめで、特に版築工法などによって突き固められた形跡は見られない。

石室は左片袖式の横穴式石室で、概ね西向き（N98°W）に開口している。玄室は長さ2.6m、幅1.3m、高さ0.7mの規模である。石室の壁は2段から4段分が残っている。床面には人頭大で厚さ3cm程度の板石が全面に敷きつめられていた。奥壁中央部付近には枕石の可能性のある板石1石が置かれている。奥壁および両側壁の内面には赤色顔料を塗布していた痕跡が確認できることから、石室の内面全体に赤彩を施していた可能性が高い。

墓道は石組みを持たない素掘りの溝状を呈するもので、長さ1.7m、幅0.9mをはかる。玄室の掘り方（墓壙）を掘り込んだ際に同時に掘り込まれている。玄室の主軸方向に対して斜行する形で取り付いている様子は、あたかも小形の竪穴式石槨の片側の小口部に後から墓道を取り付けたという感じを受ける。墓道の床面はほぼ水平で、玄門部との床面との段差は認められない。この墓道は埋葬後に埋め戻されるものであるが、土層断面の観察では掘り直し・埋め直しの痕跡は確認できなかったことから、追葬はなかったものと判断できる。玄門部にはブロック状の塊石を積み上げた閉塞石が4段分遺存していたが、仕切石は用いられていない。

玄室掘り方は、長さ4.0m、幅2.4mの規模の隅丸長形状に地山を掘り込んだもので、玄室基底石を固定する据え方は掘り込まれていない。

遺物は玄室床面の板石上に埋葬当時の姿をとどめた状態で出土した。玄室袖部には須恵器・土師器が積み重ねられており、玄室中央部からは鋤先などの鉄製品や多数の玉類などが、両側壁付近には鉄鏃や土玉などが出土した。墓道や周溝からは全く遺物は出土していない。

玄室床面から出土した須恵器57点には杯47点・高杯3点・壺3点・短頸壺3点・甕1点、土師器2点には椀・把手付き椀がある。中でも須恵器の杯は蓋と身がセットになったものが19個体もみられ、短頸壺も蓋がセットになったものがみられる。内容物に関しては残存しておらず不明である。須恵器の型式は田辺編年のMT15・TK10の2型式にわたるものであるが、墓道の土層観察などからは追葬が想

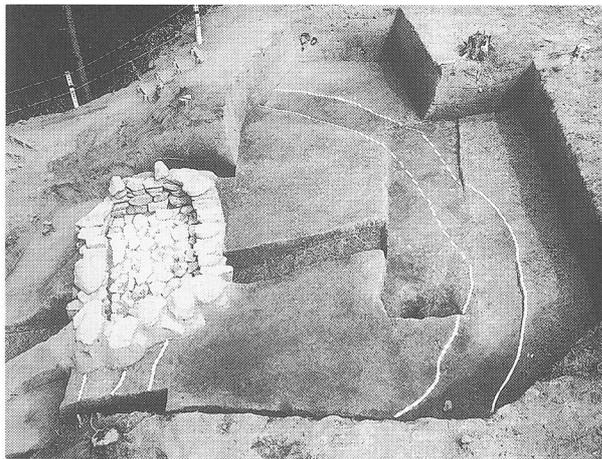


写真17 雄山5号墳全景（西より）

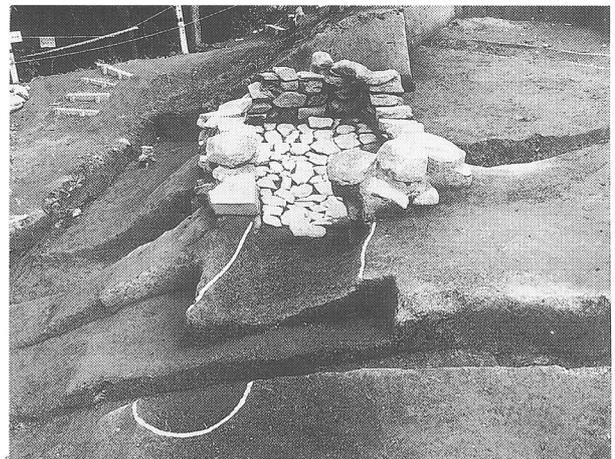
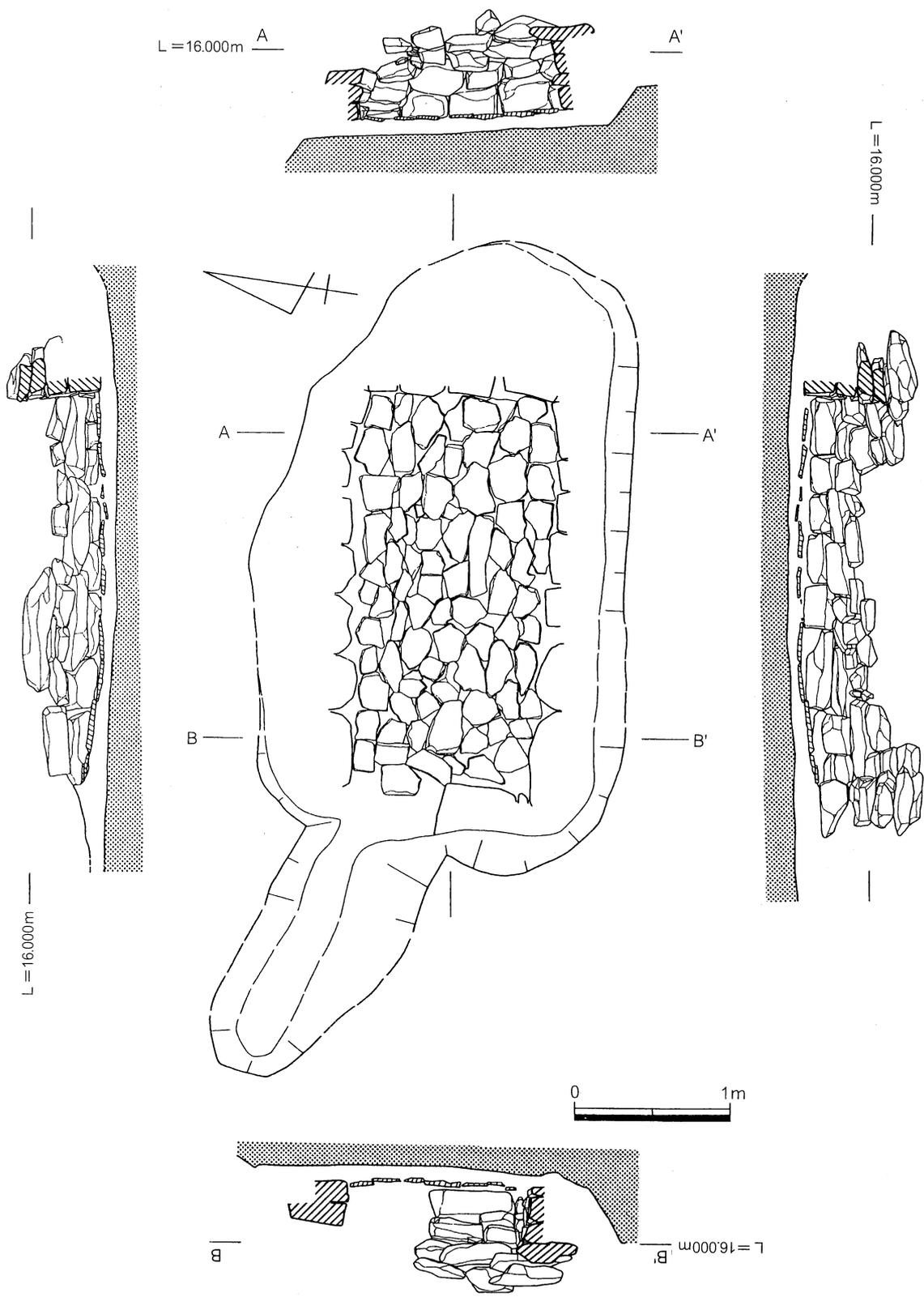


写真18 雄山5号墳石室完掘状況（西より）



第14图 雄山5号填石室实测图

定できないことを考慮すれば、両型式がみられる6世紀中頃の一括埋納と判断でき、雄山5号墳の築造時期がわかる。

鉄製品にはU字形鋤先3点・鉄鏃・刀子などがみられる。小破片となっているため種類の判断できないものもみられるが、確実に馬具といえるものは確認できない。

玉類では碧玉製管玉13点・結晶片岩製勾玉1点・水晶製切子玉5点・水晶製丸玉1点・ガラス小玉31点・土玉多数がある。管玉は両側穿孔のものもみられるが、ほとんどが片側穿孔である。土玉以外の玉類は石室中央付近に集中する出土状況を示すことから、当該箇所が被葬者の胸部付近と考えられる。また、土玉は右側壁中央やや西よりに集中する出土状況を示すことから、被葬者の右手に巻き付けられていた可能性が高い。

雄山5号墳の横穴式石室は、須恵器から導き出される年代からすると、県内でも古手の横穴式石室の一つであり、香川県内における古墳の埋葬施設の変化や横穴式石室の導入などの問題を考えるうえでも貴重な資料となり得よう。また、先述したように追葬が想定できないことからみても、これらの遺物は一括性が極めて高い資料であると言えよう。今後は、副葬品の種類・内容などの分析や副葬品の出土位置の分析などを通じて、玄室内の空間利用のあり方や被葬者像などを明らかにしていくことが重要な課題である。



写真19 雄山5号墳遺物出土状況①（東より）

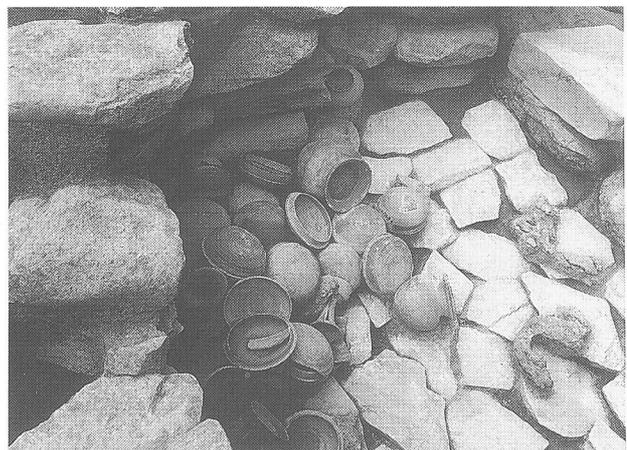
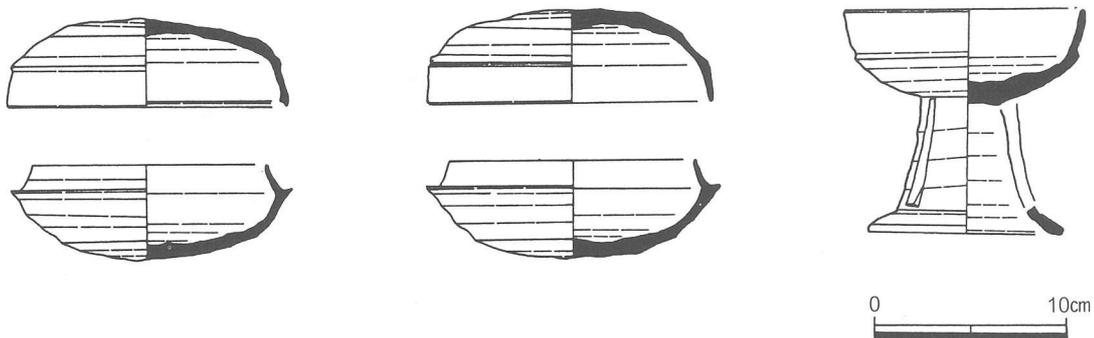


写真20 雄山5号墳遺物出土状況②（南東より）



第15図 雄山5号墳出土土器実測図

#### (4) 雄山6号墳

尾根の頂部からわずかに下がった緩斜面状に築かれた円墳である。現地形ではわずかに円墳状の高まりが確認でき、開墾によって削られた面に石材が若干顔を覗かせている状態であった。周濠の一部と石

室が遺存している。周濠は雄山5号墳と同様に古墳の尾根頂部寄りを掘りくぼめたもので、全周するものではない。墳丘と石室の上半部および古墳の東側約三分の一は後世の開墾によって失われているが、周濠の規模からみると、墳丘の直径は約10m程度と推定される。残存していた墳丘の盛り土は非常に堅緻で、土層断面観察では縞模様状の堆積がみられ、版築工法によって墳丘を突き固めたことがわかる。

石室は、左側壁前面部分に攪乱による穴が掘られているため確定はできないが、左片袖式ないし無袖式の横穴式石室と推定される。玄室は長さ3.0m、幅1.3m、高さ0.9mの規模で、概ね北西方向(N54°W)に開口している。石室の壁は1段から6段が残っている。床面には雄山5号墳のような石敷きはみられず、また壁面の内面に赤色顔料を塗布した痕跡も認められない。

玄室掘り方は、前面部分を欠損しているが、長さ5.1m以上、幅2.6mの規模の隅丸長形状に地山を掘り込んだものである。基底石の据え方は認められない。なお、墓道に関しては後世の攪乱などによって破壊されているため不明である。

遺物は玄室床面上に埋葬当時の状態で出土した。玄室右半分には側壁に沿う形で須恵器・土師器が概ね2列に並べられていた。その中には鉄製品も認められる。玄室奥壁付近には須恵器の高杯と銅鏡および管玉などの玉類が出土している。また、周溝からは須恵器の高杯と甕が一对になって出土している。

玄室床面から出土した須恵器44点には杯33点・高杯2点・壺2点・短頸壺3点・甕1点・提瓶2点・甕破片1点、土師器7点には椀3点・把手付き椀3点・小型壺1点がある。中でも須恵器の杯は蓋と身がセットになったものが15個体もみられる。内容物はほとんど残存していないが1セットのみに植物遺体と思われるものが遺存していた。須恵器の型式は田辺編年のMT15・TK10の2型式にわたるもので、雄山5号墳とほぼ同じ時期が想定される。

鉄製品には鉄鏃7点・刀子3点などがみられるが、確実に馬具といえるものは確認できない。

玉類では碧玉製管玉17点・ガラス小玉11点・土玉3点がある。管玉はほとんどが片側穿孔である。水晶製切子玉や勾玉は出土していない。

銅鏡は床面の一部に赤色顔料を塗布した上に置かれたような状態で出土した。鏡を包んだような布などは確認していない。鏡の直径は5.5cmで、背文構成は紐から外方へ向かって、珠文帯・鋸歯文帯・変形渦卷文帯の順となっており、鏡種は珠文鏡に分類される。

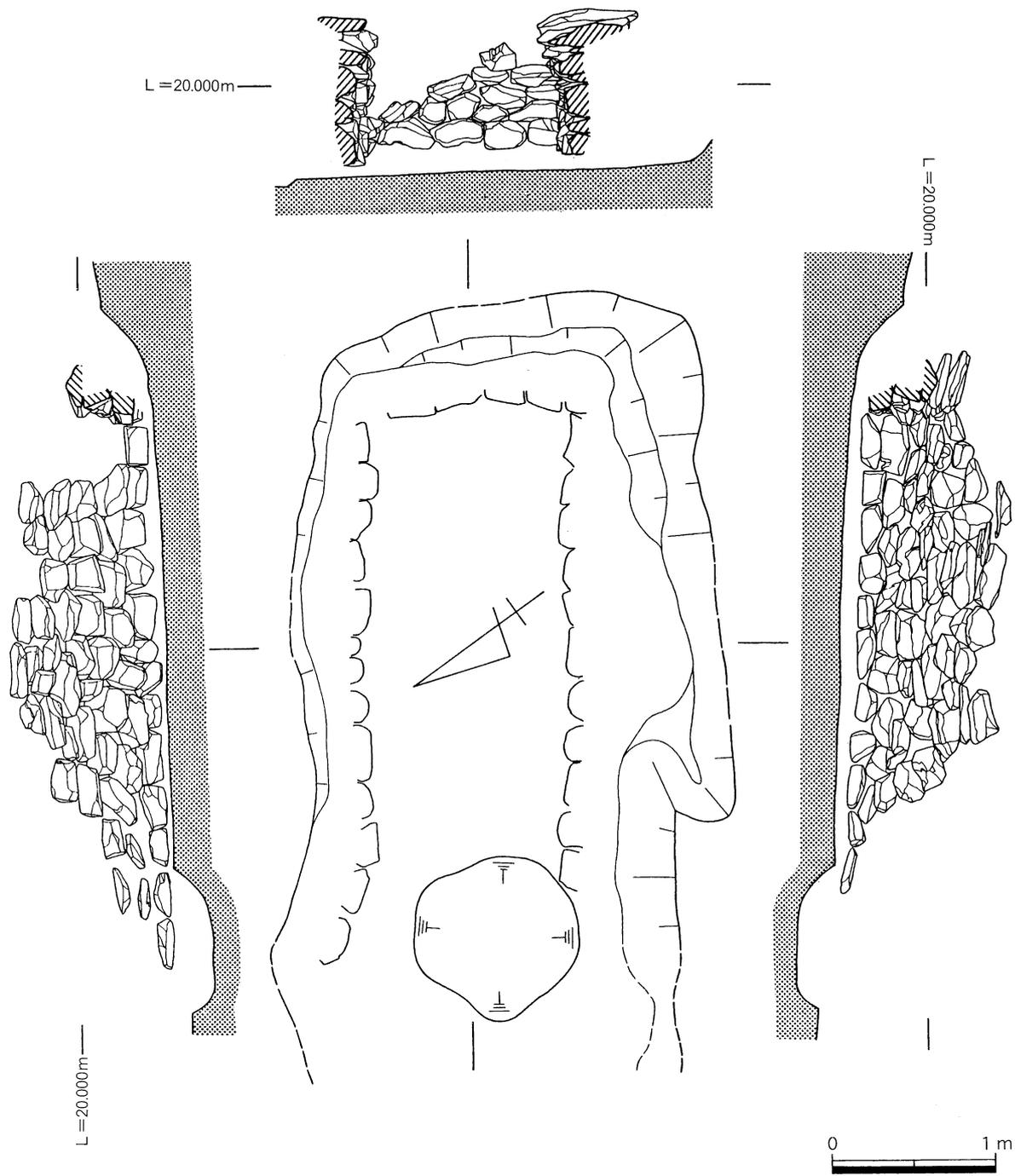
これらの遺物は雄山5号墳と同様に貴重な資料であり、個々の古墳の分析と同時に各古墳の対比を通して考えていくことが必要であろう。



写真21 雄山6号墳全景（南東より）



写真22 雄山6号墳完掘状況（北西より）



第16图 雄山6号墳石室実測図

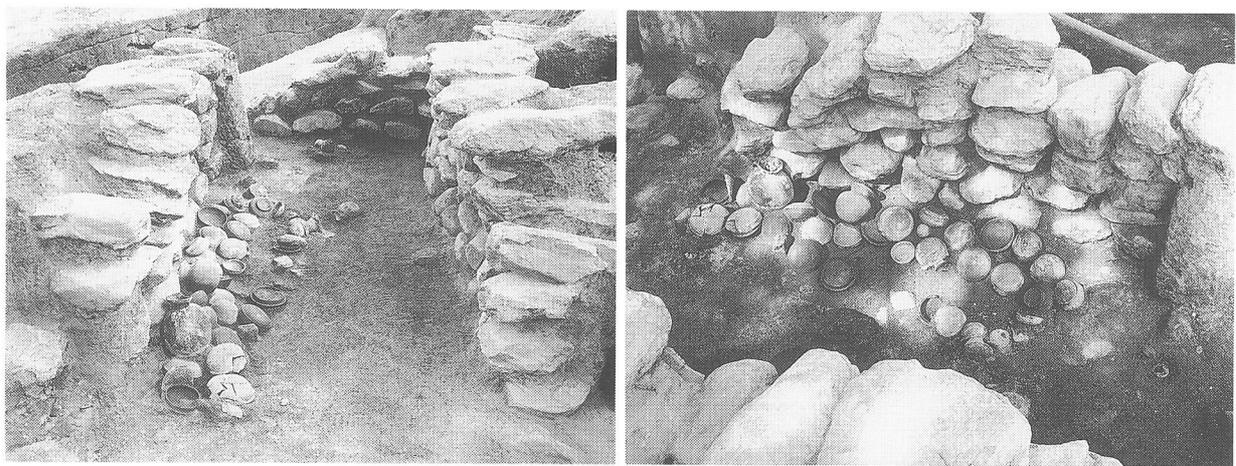
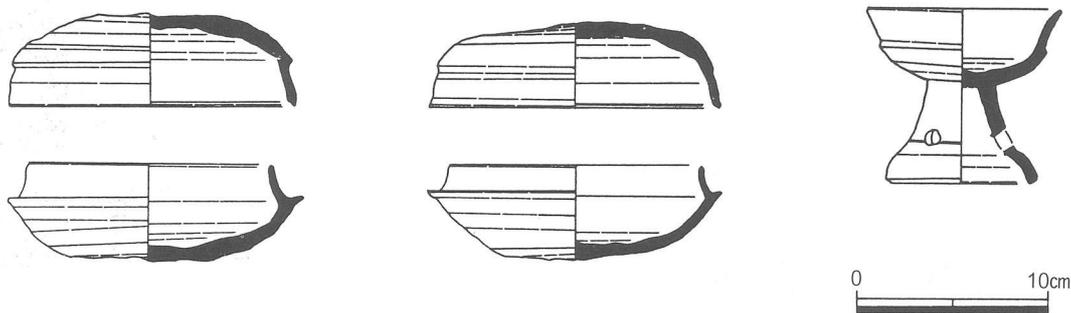


写真23 雄山6号墳遺物出土状況①（北西より） 写真24 雄山6号墳遺物出土状況②（南西より）



第17図 雄山6号墳出土土器実測図

### 3. まとめ

雄山古墳群は従来4基とされていたが、今回の調査によって新たに3基確認でき、合計7基の古墳から構成されていることが明らかになった。このうち今回は4基の調査を行い、特筆すべき多くのデータが得られた。各古墳についてはすでに触れているため、ここでは全体のまとめを行う。

4基の古墳は規模・袖部形態・床面構造・副葬品の内容といった点に統一性がみられない。袖部形態は両袖式・片袖式（右片袖、左片袖）・無袖式と4基ながら全型式がほぼ出揃っている。副葬品も同様で、4号墳は馬具を、5号墳は鉄製農耕具を、6号墳は鏡を保有し、逆に7号墳は玉類を持たない。このように多くの相違はあるが、古墳の築造時期と羨道の欠如という共通性もみられる。4号墳は盗掘を受けていたものの、5・6・7号墳は玄室床面の遺存状況が良好で、大部分の副葬品は原位置を保った状態で検出できた。概ねMT15型式とTK10型式に該当する須恵器が多量に副葬されている。これらの古墳群は両型式がみられる6世紀中頃という比較的短期間に築造されたと考えられる。県内でも横穴式石室の導入期にあたる時期に羨道を持たず、墓壙に連結する墓道を有する横穴式石室が存在することは特筆すべきことである。玄室床面と墓道床面はほぼ水平で、段差が認められないものの、竪穴系横口式石室の影響を多分に受けている。一方、4号墳で見たように玄室は畿内型横穴式石室としてすでに完成されたものである。雄山古墳群の石室にはこの両者が確認できる折衷式の石室であり、瀬戸内海という海上交通路を前面にした古墳群の立地の意義は極めて大きい。

今後、各古墳の遺物・石室等の詳細な分析を通して、雄山古墳群の全体像を解明し、さらに特異な形態を持つ石室についても言及することが重要な課題である。

## IV. 兀塚遺跡

### 1. 遺跡の立地と環境

兀塚遺跡は、高松平野の西辺部にあたる高松市檀紙町兀塚と円座町佐古・川向にまたがって広がる遺跡である。遺跡の西部には、古川が蛇行しながら北に向かって流れ、さらに西方には、堂山・六ツ目山・伽藍山などの山塊がある。東方には、2級河川の香東川が北に向かって流れ、さらにその東方には高松平野の中心部が広がっている。遺跡の周辺は、現在閑静な田園地帯となっており、多数のため池が点在する。遺跡周辺の標高は30m前後で、地表面には若干の起伏が認められる。この凹地部分を除いて、遺跡周辺には一町方格の条里型地割が残存する。

本遺跡の周辺には、旧石器時代から近世に至る幅広い時代の遺跡が存在している。

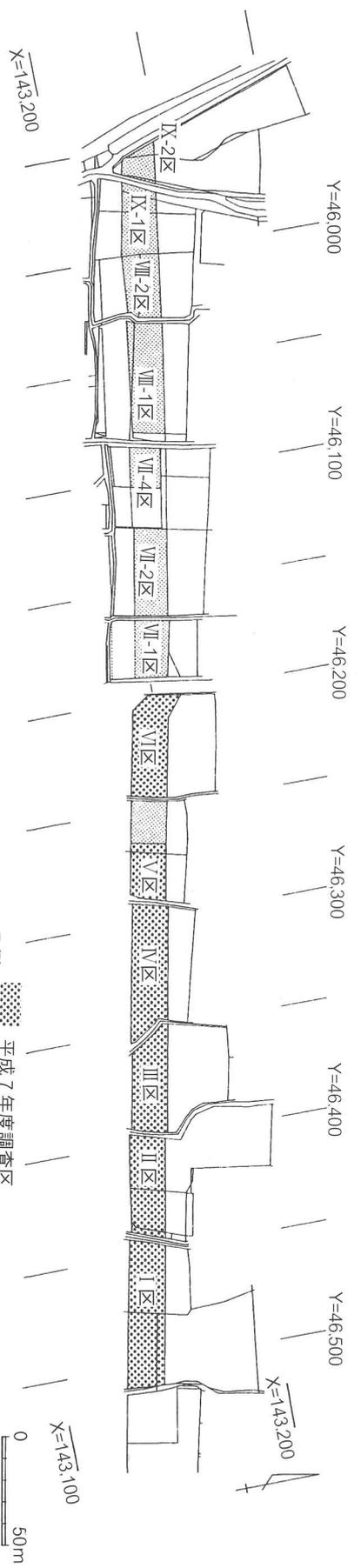
旧石器時代の遺跡としては、正箱遺跡や中間西井坪遺跡などがある。中間西井坪遺跡は、六ツ目山北東麓の緩斜面に位置する遺跡で、AT火山灰層の上位から、船底形石器と小型ナイフ形石器を主体とする良好なブロックを検出している。縄文時代の遺跡としては、六ツ目山の西斜面の国分寺六ツ目遺跡の調査で、約60点の大型剥片が折り重なるように出土したサヌカイト集積遺構が検出されており、石器製作跡と考えられている。弥生時代の遺跡になると数が増加し、国分寺下日名代遺跡、中間西井坪遺跡、正箱遺跡などで遺構・遺物が確認されている。正箱遺跡では、後期と考えられる直径約6mほどの円形竪穴住居が検出されている。古墳時代の遺跡も、周辺に多数の円墳や前方後円墳が築造されている。国



- 7 三つ塚古墳
- 8 山王神社古墳
- 9 うたい塚古墳
- 10 伽藍山東麓古墳
- 11 薬用寺遺跡
- 12 正箱遺跡
- 13 兀塚遺跡
- 14 中間西井坪遺跡
- 15 矢塚北古墳
- 16 矢塚南古墳
- 17 弓塚下古墳
- 18 西山崎1号墳
- 19 西山崎2号墳
- 20 西山崎3号墳
- 21 西山崎4号墳
- 22 馬塚
- 23 犬のくそ塚
- 24 北岡城跡
- 25 本糞寺北1号墳
- 26 本糞寺北2号墳
- 27 本糞寺西古墳
- 28 奈良須池古墳
- 29 堂山城跡
- 30 国分寺六ツ目遺跡
- 31 国分寺六ツ目古墳
- 32 おま泉遺跡
- 33 国分寺楠井遺跡
- 34 国分寺下日名代遺跡
- ▲ 塚

- 1 中森1号墳
- 2 中森2号墳
- 3 御厩大塚
- 4 万灯塚1号墳
- 5 御厩天神社古墳
- 6 御厩池古墳

第18図 遺跡の位置と周辺の遺跡 (1/50,000)



第19図 調査区割図 (1/3,000)

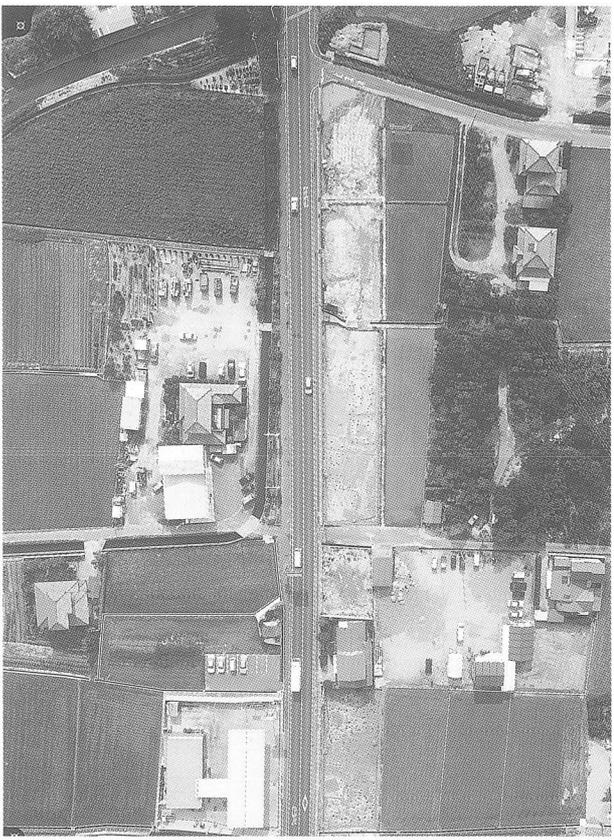


写真25 遺跡全景 VII~IX区

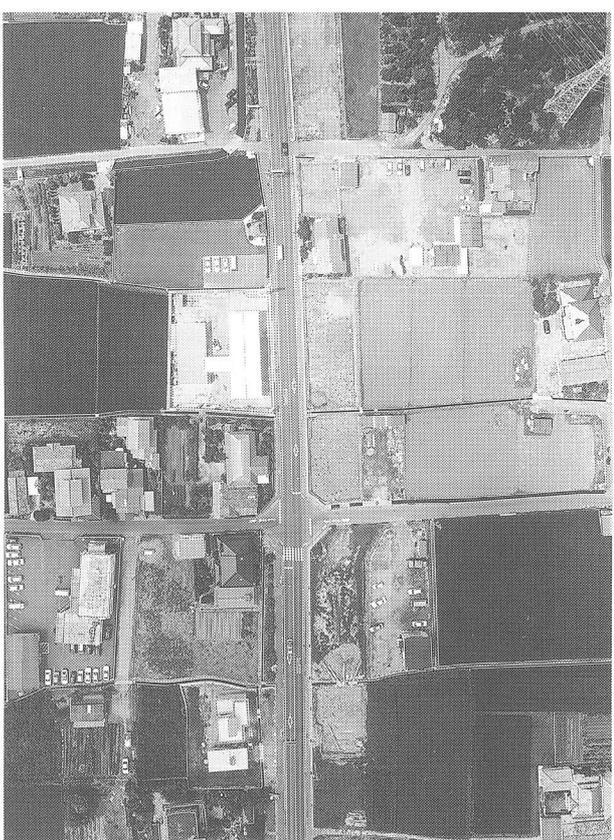
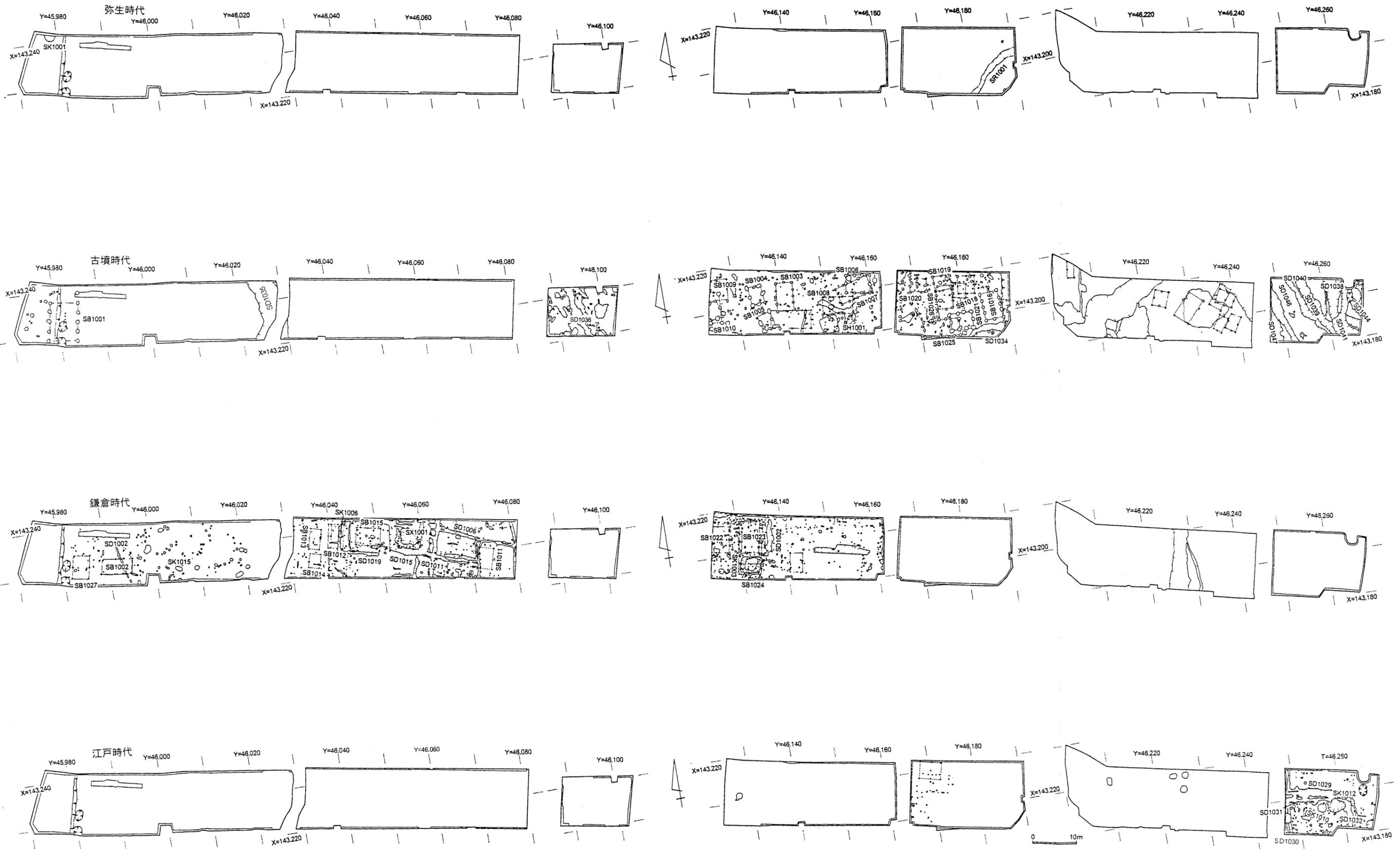


写真26 遺跡全景 V~VIII区



第20図 遺跡の変遷

分寺六ツ目古墳は全長約21mの前方後円墳で、後円部に竪穴式石室、粘土槨、箱式石棺の3基の埋葬施設を設けていた。そのうち竪穴式石室から、鉄剣・鉄刀・鉄斧・鉄鏃などが出土し、4世紀頃の築造が想定されている。御厩天神社古墳は、全長約30mの前方後円墳で、墳丘裾部から円筒埴輪が採集されており、5世紀中頃の築造が想定されている。また、堂山・六ツ目山の東斜面には多数の円墳が群集していたが、調査されずに破壊された古墳が多い。そのうちの本堯寺北1号墳は、直径約10mほどの小円墳とされ、小規模の竪穴式石室から円筒埴輪棺が出土している。そのほかに三ツ塚古墳や御厩大塚古墳などは、横穴式石室を有している。また、中間西井坪遺跡で4世紀末から5世紀初頭の埴輪や陶棺などを焼成した大型の野焼き土坑や、それに付随する竪穴式住居跡及び円筒埴輪を伴う古墳3基が検出されている。古代の遺跡としては、正箱遺跡で奈良時代後半から平安時代前半にかけての掘立柱建物群が検出され、なかには40㎡を越える大型の建物跡も確認されている。中世から近世にかけての遺跡としては、国分寺楠井遺跡で室町時代の土師質及び瓦質の土器を生産した窯跡が検出され、薬王寺遺跡、中間西井坪遺跡では小規模な集落跡が検出されている。また、堂山山頂には堂山城跡が所在する。その他、本遺跡の周辺にはいわゆる「塚」が多く存在している。中には古墳の可能性もあるものもあるが、ほとんどのものについては時代や性格については不明である。

## 2. 調査成果の概要

本遺跡の発掘調査は昨年度からの継続事業であることから、昨年度の地区、グリッドの設定を踏襲して調査を行った。本年度の調査対象地は昨年度調査地の西側に位置する。本年度の調査区では弥生時代、古墳時代、鎌倉時代、江戸時代の遺構・遺物が検出された。

### (1) 弥生時代

昨年度の調査ではV-1区で3基の円形周溝墓が検出されたが、今年度の調査では墓や集落は検出されなかった。弥生時代の遺構密度は希薄で、VII-1区で数個の柱穴、遺跡の西端IX-2区で2基の土坑が検出されただけである。VII-1区の柱穴からは弥生土器甕の底部が出土した。

#### 土 坑

SK1001 遺跡の西端IX-2区の北端で検出された土坑である。平面形は円形で、径2.3m前後、深さ0.7mを測る。埋土の上部からは径0.1~0.2mの礫とともに弥生土器片が多量に出土した。土器はいずれも小破片で、鉢・甕片がみられる。時期は弥生時代後期に属する。

### (2) 古墳時代

遺跡の中央部やや西寄りVI区からVII-1区、VII-2区にかけて古墳時代後期の集落が検出された。遺構は掘立柱建物24棟と竪穴住居1棟のほか、柱穴多数が検出された。また、遺跡の西部IX-1区でも古墳時代後期の掘立柱建物が検出された。

#### 竪穴住居

SH1001 VII-2区の南部で検出された竪穴住居である。平面形は隅丸方形で7.0×7.6m、深さ0.15mを測る。SH1001の壁沿いには幅0.3~0.6mの周溝が巡っており、北壁沿い中央やや東寄りに平面形楕円形の径0.5m、深さ0.2mのくぼみ(P5)が検出された。このくぼみの埋土中位には厚さ2~3cmの焼土が堆積していた。焼土の堆積から火を焚く施設であったことがうかがわれる。なお、住居内からは計19個の柱穴が検出されたが、深さや位置関係からP1~P4の柱穴が建物の支柱穴であったと考えられる。これらの柱穴は建物の平面形からみると東寄りに寄っている。P5が東寄りに寄っていることと

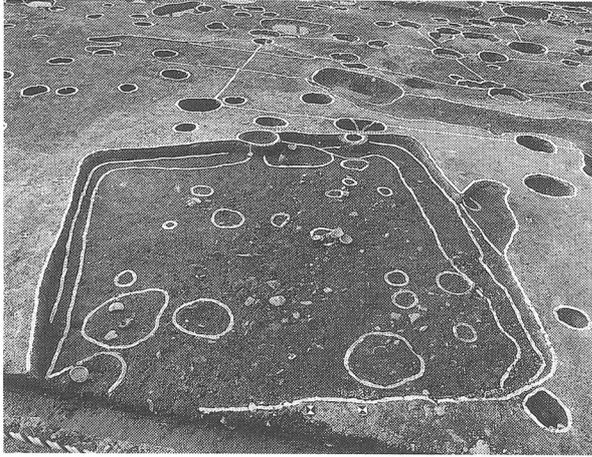


写真27 SH1001 (南より)

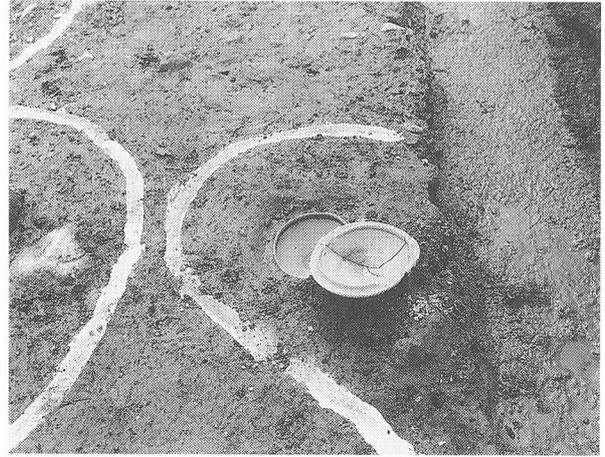
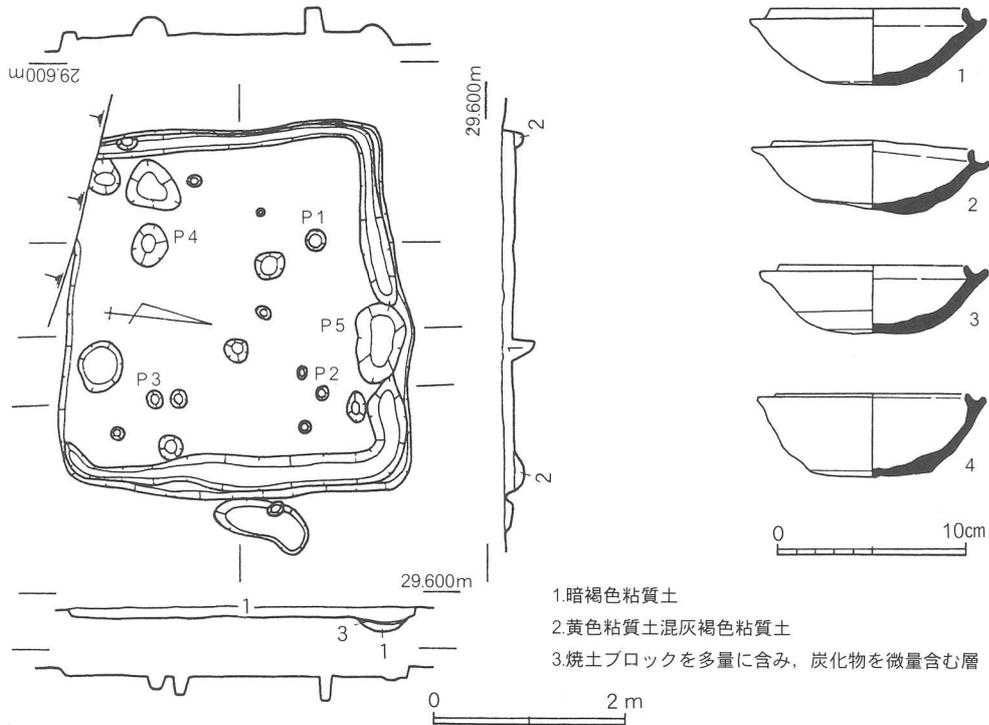


写真28 SH1001 遺物出土状況 (西より)



第21図 SH1001 平・断面図 (1/80), 出土遺物 (1/4)

ことと関係するのであろう。出土土器は床面より土師器高杯1, 鉢3, 須恵器杯身4 (1~4), 高杯1のほか埋土中より, 土師器・須恵器の小破片が出土した。時期は6世紀末から7世紀初頭に属する。

#### 掘立柱建物

昨年度の調査区 (VI区) においては7棟の掘立柱建物が検出されているが, 本年度調査区のVII-1区, VII-2区, IX-2区においても17棟の掘立柱建物が検出された。掘立柱建物の棟または梁の方向はN-22°-WからN-10°-Eを測る。昨年度調査区のVI区では, SR04以西で検出された掘立柱建物 (SB07) は本年度調査区のVII区で検出された掘立柱建物群とほぼ同方向のN-10°-Eを測るが, SR04以东で検出された掘立柱建物群の主軸方位はN-20°-EからN-41°-Eを測る。掘立柱建物の規模は1間×5間が1棟 (SB1001), 2間×5間が1棟 (SB1025), 2間×4間が3棟 (SB

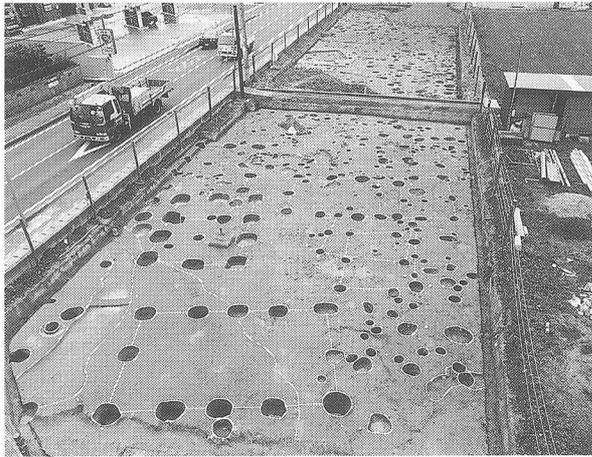


写真29 VII-1区 古墳時代集落



写真30 VII-2区古墳時代集落

1003・1007・1016), 2間×3間が3棟(SB1006・1021・1026), 2間×2間が8棟(SB01・04・05・06・1004・1005・1017・1019), 1間×3間が2棟(SB02・1008), 1間×2間が3棟(SB03・1018・1020), 2間×2間以上が1棟(SB1010), 1間以上×2間(SB1009), 1間×2間以上が1棟(SB07)である。IX-1区で単独で検出されたSB1001の柱穴の平面形は隅丸方形を呈し、柱穴の規模も大きく、1辺0.7~1.0m, 深さ0.4~0.5mを測る。VII区で検出された他の掘立柱建物の平面形はいずれも円形を呈する。また、柱穴の規模を比べると、径0.3~0.4mの柱穴で検出された建物(SB1008・1017・1018・1019)と径0.6~1.0mの柱穴で検出された建物(SB1003~1007・1009・1010・1016・1020・1021・1025・1026)の2種類がみられる。

### (3)鎌倉時代

VII-2区では鎌倉時代の掘立柱建物3棟が検出され、VIII-1区では掘立柱建物5棟と溝十数条、柱穴、IX-1区では掘立柱建物2棟と土坑墓1基と柱穴が検出された。

#### 掘立柱建物

VII-2区で3棟, VIII-1区では5棟, IX-1区では2棟の掘立柱建物が検出された。古墳時代の建物の主軸方位はN-22°-WからN-10°-Eと32度の幅でばらついているが、鎌倉時代の建物の梁または棟の方位はN-9°-EからN-13°-Eで、ほぼ同一方位を測る。なお、遺跡の周囲に現存する条里型地割りはN-10°-Eを測り、建物の主軸とほぼ同一方位である。掘立柱建物の規模はVII-2区

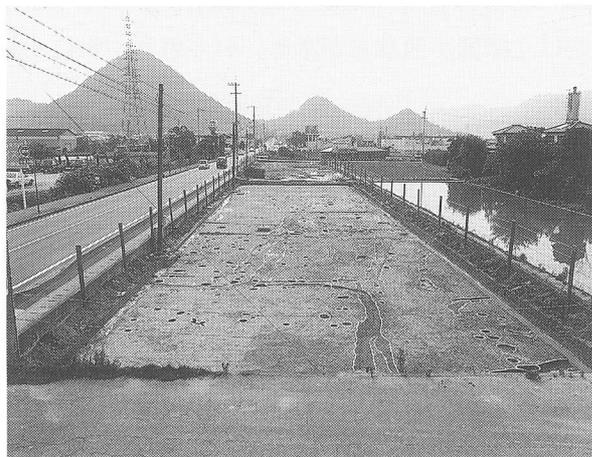


写真31 VIII-1区鎌倉時代掘立柱建物・溝  
(東より)

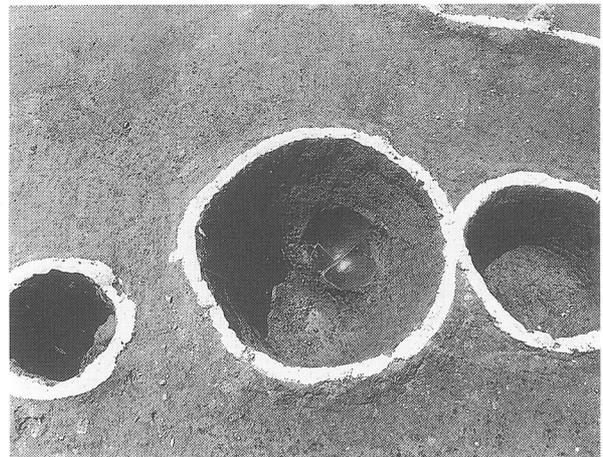


写真32 VII-2区 SP1001  
遺物出土状況(北より)

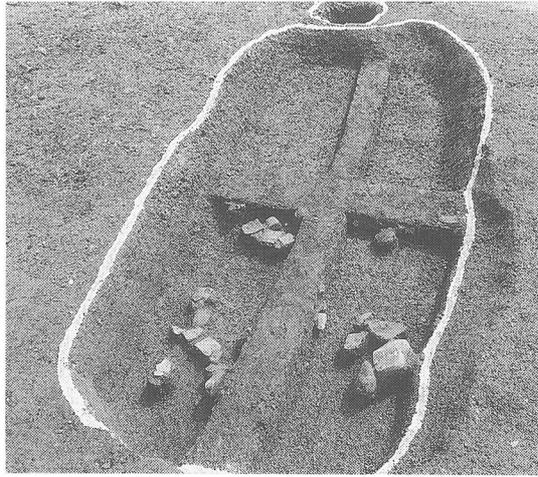
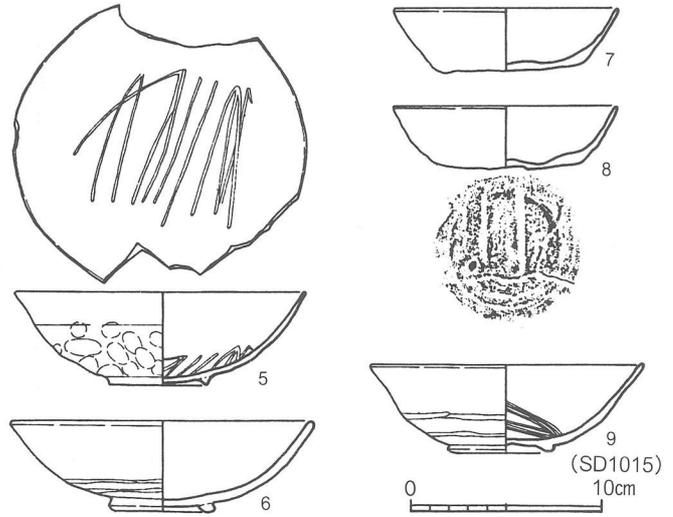


写真33 ST 1001 (北より)



(VII-1 SP1044出土)

第22図 元塚遺跡出土土器 (1 / 4)



写真34 SD 1015 遺物出土状況 (南より)

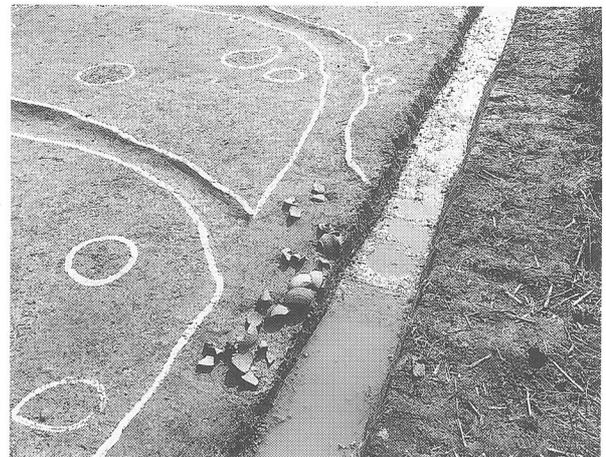


写真35 SD 1015 遺物出土状況 (東より)

ではSB1022は2間以上×2間(3.8m以上×5.6m), SB1023は3間×2間(7.0×4.0m), SB1024は5間×2間(12.3×5.0m)を測り, 比較的大きいものが多いが, VIII-1区・IX-1区ではVII-2区の建物よりも小型で1間×2間の建物が大半を占める。SB1011(3.3×4.6m), SB1013(2.3×4.4m), SB1014(2.3×3.0m), SB1015(3.9×5.3m)はいずれも1間×2間の建物である。SB1012(2.7×5.3m)は2間×2間を測り, 西側に庇をもつ。IX-1区SB1002は3間×1間(6.1×3.2m), SB1027は2間×1間(5.0×3.6m)を測る。柱穴からの出土遺物は土師器小皿などがある。いずれも中世に所属するものと考えられる。

#### 柱 穴

掘立柱建物の周辺からは多数の柱穴が検出された。柱穴の規模は径0.3~0.6m, 深さ0.3~0.7mを測るものが大半である。VII-2区SP1001では柱穴の埋土中位から瓦器碗(5)が底部を下に向けた状態で出土した。また, VIII-1区SP1044では須恵器碗(6)が柱穴の埋土上位より, 底部を下に向けた状態で出土した。

#### 土坑墓

ST1001 IX-1区の西部で検出された土坑である。平面形はほぼ方形を呈し, 長辺2.1m, 短辺0.8~1.0mを測る。長軸の方位はN-12°-Eを測る。遺物は土師器小皿・瓦器碗の小破片が北半分に散らば

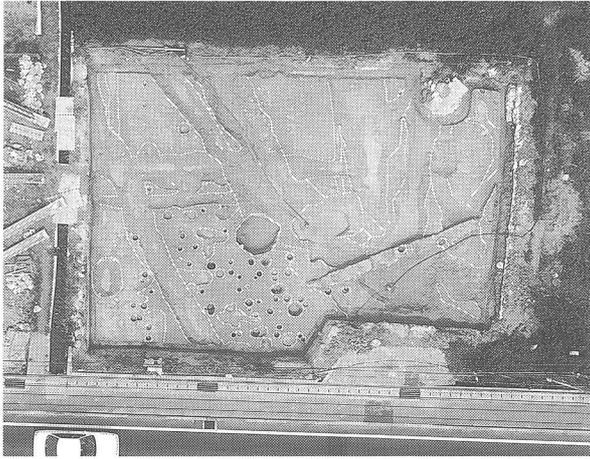


写真36 V-2区全景



写真37 V-2区全景（南東より）

った状態で出土した。

#### 溝

Ⅷ-1区では、縦横に走る溝が多数検出された。溝はN-10~20°-EまたはE-10~20°-Sを測る。付近で検出された掘立柱建物の主軸方位とほぼ同方位を測る。SD1019では埋土最上部に炭化物と焼土、SD1015では埋土中位に炭化物が検出された。

#### (4) 江戸時代

V-2区では柱穴・井戸・土坑・溝、Ⅶ-1・2区では土坑、柱穴が検出された。V-2区ではSD1029・1030・1031で囲まれた方形区画（東西12.5m、南北7.0m以上）からは多数の柱穴、井戸1基、土坑2基が検出されたことから、屋敷地であったと考えられる。

#### 井戸

SK1010 平面形は円形を呈し、径1.8m、深さ1.0mを測る。埋土最上層は黄色ブロック混じり淡灰色砂質土で、その下は大礫（径0.1~0.2m）混じり灰色砂質土である。底面はほぼ平坦である。遺構は細砂層を掘り込んでおり、かなり湧水がみられたことから、井戸であったものと考えられる。

#### 土坑

SK1012 平面形は不整形円形を呈し、長径3.5m、短径2.2m、深さ0.4mを測る。埋土は上層が大礫（径0.1~0.4m）混じり灰色砂質土、下層が淡青灰色細砂、暗灰色粘質土である。深さは0.4mと浅いが、細砂層を掘り込んでおり、湧水がみられることから、井戸または水溜めの機能をもつ遺構であると考えられる。

### 3. まとめ

本年度の調査区においては弥生時代・古墳時代・鎌倉時代・江戸時代の遺構・遺物が検出された。遺構面の標高は最東部のV-2区において29.4mだが、Ⅶ-1・2区は29.5~29.6mと高く、Ⅶ-4区は28.6mと低い。また、道路を隔てて西側の調査区Ⅷ-1・2区では29.3~29.5mと高く、微高地状を呈する。最も高いⅦ-1・2区では古墳時代後期の集落が検出され、Ⅶ-2区西部では鎌倉時代の集落も検出された。また、鎌倉時代の集落は低位部のⅦ-4区にはみられず、西側の微高地Ⅷ-1区で検出された。なお、古川の東岸縁のⅨ-2区では耕作土直下には細砂・粗砂層の堆積がみられた。この調査区の

現地表面の標高は28.5～27.1mと低く、遺構・遺物は検出されなかった。

古墳時代の集落は微高地のⅦ-1・2区、Ⅸ-1区で検出されたが、前述のように掘立柱建物と竪穴住居で構成される。建物の主軸の方向はN-22°-WからN-10°-Eと32°のばらつきがある。一方、鎌倉時代の建物の主軸の方向はN-9°-EからN-13°-Eで、ほぼ同一方位を測り、遺跡周辺の田畑にみられる条里型地割りの方向とほぼ一致する。これらのことから、少なくとも鎌倉時代には周辺にみられる条里型地割りは存在していたものと考えられる。また、Ⅷ-1区で検出された周囲の条里型地割りに平行して走る鎌倉時代の溝は用排水路であったと考えられるが、SD1004とSD1007の間隔は7.8～8.0m、SD1007とSD1011の間隔は10.0～10.8m、SD1006とSD1007の間隔は4.5～5.0mと狭く、自然地形の高低差を克服するために小区画の田畑が存在していたものと考えられる。なお、古墳時代は整然とした地割りはまだ存在しておらず、鎌倉時代には整然とした地割りに平行する田畑や屋敷割が存在したのと考えられるが、古墳時代の建物と同様、鎌倉時代でも微高地に集落は営まれていたことがうかがえた。

## V. 竹元遺跡

### 1. 遺跡の立地と環境

竹元遺跡は、高松市東植田町字竹元にある。今回調査を行う地点の県道をはさんですぐ東方の田んぼの土手が大雨のため土砂崩れし、弥生時代後期の土器が多数出土した。遺跡のすぐ北を春日川の支流の一つの朝倉川が、南東から北西方向に向かって流れている。本遺跡は、その朝倉川の南岸河岸段丘上に位置し、標高は約50mほどである。朝倉川の両側は、春日川に合流部付近まで続く尾根がのびて、山が迫った小盆地状の地形である。

本遺跡の周辺においては、旧石器時代の報告は今のところなく、縄文時代は、下司遺跡や村井遺跡から遺物の報告がある。

弥生時代になると周辺各地に遺跡が展開している。光専寺山遺跡では、口縁部が逆L字状の甕などが出土し、前期末と考えられる。中山田遺跡は中期末から後期前半の遺跡で、竪穴式住居跡3棟・倉庫跡2棟・テラス状遺構が検出され、テラス状遺構から分銅形土製品が出土している。後期のものとしては、葛谷遺跡や円養寺遺跡があり、前者からはベット状遺構を伴う竪穴式住居が、後者からは古墳時代初頭に至るまでの壺棺墓や組合せ石棺墓が検出されている。また、三谷通谷遺跡で、甕棺墓が検出されている。



- |                |           |
|----------------|-----------|
| 1 三谷通谷遺跡       | 29 ツツ子池古墳 |
| 2 池田下代古墳       | 30 雷塚古墳   |
| 3 光専寺山遺跡       | 31 まどろこ古墳 |
| 4 川東2号墳        | 32 南原古墳   |
| 5 川東1号墳        | 33 南原遺跡   |
| 6 天親塚          | 34 龍現神社古墳 |
| 7 こんほうじ古墳      | 35 城池古墳群  |
| 8 村井遺跡         | 36 池下古墳群  |
| 9 池田合子神社古墳     |           |
| 10 中山田遺跡       |           |
| 11 尾越古墳        |           |
| 12 稗田東古墳       |           |
| 13 大亀古墳群       |           |
| 14 本村古墳群       |           |
| 15 切谷遺跡        |           |
| 16 松尾池北古墳      |           |
| 17 松尾池1号墳      |           |
| 18 円養寺遺跡       |           |
| 19 葛谷遺跡        |           |
| 20 下司遺跡        |           |
| 21 下司廃寺        |           |
| <b>22 竹元遺跡</b> |           |
| 23 十河城跡        |           |
| 24 出之山古墳       |           |
| 25 高柿墳墓群       |           |
| 26             |           |
| 27 公洲池窯跡       |           |
| 28             |           |

第23図 遺跡の位置と周辺の遺跡 (1/50,000)

## 2. 調査概要

調査区は県道塩江屋島西線の西側に位置し、延長90mを測る。北から順にⅠ～Ⅳ区として調査を行った。Ⅰ区の県道を挟んで東側には過去、集中豪雨のため土砂が崩れ、弥生後期後半の土器が多量に出土した地点がある。また、Ⅰ区の北側は平成5年度、香川県教育委員会文化行政課が発掘調査を実施し、弥生時代の竪穴住居と溝、縄文時代の土坑が検出されている。

今回の調査ではⅠ・Ⅱ区から弥生時代後期の溝3本と柱穴5個、弥生時代の遺構面の下層から、縄文時代晩期の自然河川・土坑を検出した。Ⅲ・Ⅳ区は弥生土器、縄文土器の包含層を確認したが、遺構は検出できなかった。いずれの調査区も弥生時代の遺構面は現地地表下0.8～1.0mで、縄文時代の遺構面は1.4～2.2mであった。

### (1) 縄文時代晩期

Ⅰ区では4本の自然河川が検出された。いずれも南東から北西方向に走る。埋土からは縄文晩期後半の突帯文土器が出土した。底面付近には厚さ0.2～0.3mの小礫混じり粗砂層が堆積し、その上層には厚さ1m前後の細砂層が堆積していた。

Ⅱ区では1基の土坑が検出された。遺構面を形成する土は灰黄色小礫混じり砂質土である。遺構埋土は灰黄色粘質土で、遺構面を形成する土と類似する。埋土より、縄文晩期の土器小片が少量出土した。

Ⅲ区では現地地表下1.4～1.8mの黄褐色粘質土、灰色小礫混じり細砂中から縄文晩期の土器破片が少量出土した。遺構は検出されなかった。Ⅳ区でも現地地表下1.7～1.9mの灰色粘質土から縄文晩期の土器が少量出土した。Ⅲ区同様、遺構は検出されなかった。

### (2) 弥生時代後期

Ⅰ区では5個の柱穴と3条の溝が検出された。SD02・SD04は重複しているが、土層堆積よりSD04のほうが新しいことがうかがわれた。SD02・04は南部は調査区外に連続するため、全体の規模は不明であるが、SD02は幅3.0m、深さ1.8m、SD04は幅3.5m以上、深さ1.8mを測る。SD04の埋土は灰色小礫混じり粗砂で、SD02の埋土は下層が灰色細砂で、上層が暗灰色粘質土である。SD02・04からは弥生後期後半の土器がコンテナ13箱程度出土した。

## 3. まとめ

今回の調査で縄文時代晩期の土坑と自然河川、弥生時代後期の溝と柱穴等が検出された。高松平野の縄文時代の遺跡では高松市林町の林・坊城遺跡、高松市新田町の小山・南谷遺跡で発掘調査が行われている。林・坊城遺跡では晩期後半の土器・木製品を含む自然河川、小山・南谷遺跡では後期の自然河川が検出された。竹元遺跡で検出された縄文時代晩期後半の突帯文土器を含む自然河川、土坑は高松平野で数少ない縄文時代の遺構で、貴重な資料であろう。

また、弥生時代の溝SD02・04からは完形品に近い土器も多量に出土した。弥生時代後期後半の土器構成を示す良好な資料であろう。



## VI. 南天枝遺跡

### 1. 位置と環境

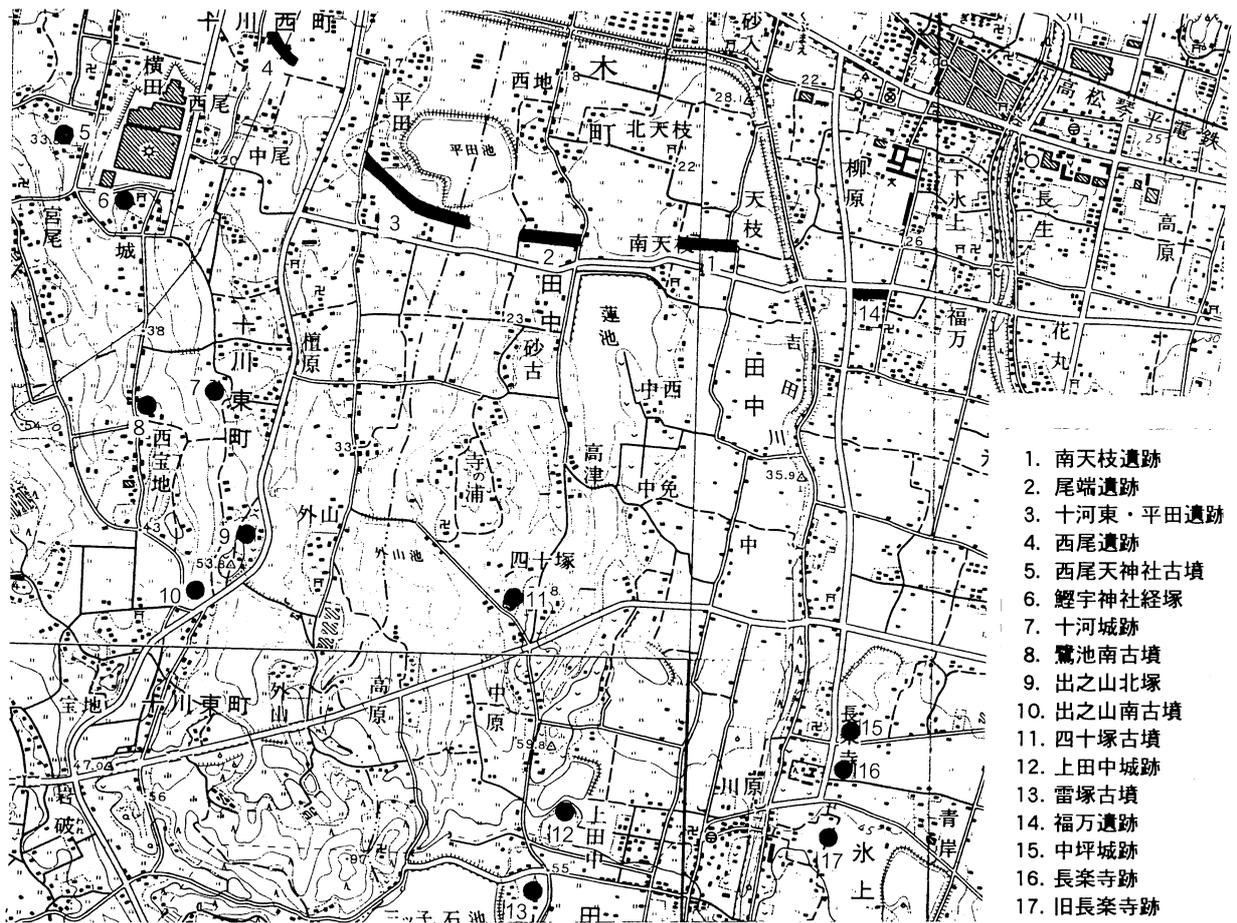
南天枝遺跡は、高松市と三木町の境界より東へ延長800m、町道田中氷上線に隣接した木田郡三木町田中南天枝に所在する。地形的には蓮池と吉田川に挟まれた間に延びる低丘陵の先端部分に位置し、周辺の標高は28m前後を測る。

周辺の遺跡では弥生時代～中世までの諸遺跡が存在する。旧石器・縄文時代の資料は極めて微量であるが、十川東・平田遺跡の有舌尖頭器がある。

弥生時代の遺跡は最近の調査により増加傾向にある。前期の段階では農学部遺跡、福万遺跡、中期では鹿伏・中所遺跡、白山2・3遺跡等の集落がある。なお、白山1遺跡からは扁平鈕式の銅鐸が出土していることは著名である。後期には鹿伏・中所遺跡、西土居遺跡等の拠点集落の調査がある。また、本遺跡の隣接地の十川東・平田遺跡、砂入遺跡等では小規模な集落の調査例がある。

古墳時代には本遺跡の南方丘陵上に、後期古墳が点在するようになる。本遺跡の所在する低丘陵上には雷塚古墳、四十塚古墳等の古墳が所在するが、実態は不明瞭である。集落の調査例は少なく、本遺跡と砂入遺跡の調査例があるだけである。

古代の寺院跡では白鳳～奈良時代にかけて相次いで建立されたと考えられる始覚寺、香華寺、上高岡廃寺、長楽寺等が知られている。集落の調査例では西尾遺跡及び本遺跡の西300mに位置する尾端遺跡



第26図 遺跡位置及び周辺の遺跡 (1 / 25,000)

等の調査がある。

中世では東讃で勢力を持った十河氏の居城である十河城が、南西の丘陵上に築かれる。その関係からか、周辺には小規模な中世山城が比較的多く点在する。また、集落では本遺跡の他、十川東・平田遺跡、福万遺跡等、最近の調査により増加傾向にある。

## 2. 調査成果の概要

調査対象地は町道氷上田中線に平行する形で、東西延長170m 面積 3,800㎡を測る。調査区の設定は東より I a～I c区に3区分して調査を実施した。調査地の地目は全て水田である。

地形的には本遺跡は、3条の埋設谷と3つの微高地（微高地1～微高地3）からなる。微高地の上面は顕著な削平を受けており、耕作土直下で遺構面を検出した。微高地上からは古墳時代末、中世の集落及び江戸時代の遺構を検出した。3条の埋設谷では3面の遺構面を検出している。上位で中世の集落、下位で古墳時代末の集落を検出した。

今回の調査では弥生時代後期、古墳時代末、奈良～平安時代、鎌倉～室町時代前半、室町時代末～江戸時代前半の遺構・遺物を検出した。この内弥生時代後期と奈良～平安時代は少量の遺物が出土したにすぎず、周辺に該時期の遺跡が展開する可能性を指摘するにとどまる。

### (1) 古墳時代末

当該期の遺構は対象地のほぼ全域より検出しているが、集落の中心はI a区の西半部よりI c区の東半部の範囲内に展開する。主要な遺構はSH01・03, SB01～22, SD01～06等である。なお、I c区のSD04・05は埋設谷の最深部より検出した溝状遺構であるが、検出状況より人為的な遺構と捉えるより、谷底に所在する小流路と考えられる。

この集落の代表的な遺構は掘立柱建物である。合計で22棟検出したが、柱穴出土の遺物が乏しく、とりあえずこの時期に加えている建物も数棟含んでいる。検出した掘立柱建物群は、主軸方位のバラツキがかなりある。また、重複する事例も数住居でみられる点より、数時期の時期差が考えられる。これらの建物群を主軸方位をふまえて分類すれば、①SB02・04・05・11～13・18 ②SB01・06・10・15 ③SB03・16・17・19・21 ④SB07・08・09・14等に4区分できる。この分類が必ずしも時期差を表すものとは言い切れない点もあるが、4時期程度の時期差があるものと理解できる。これらの建物群の詳

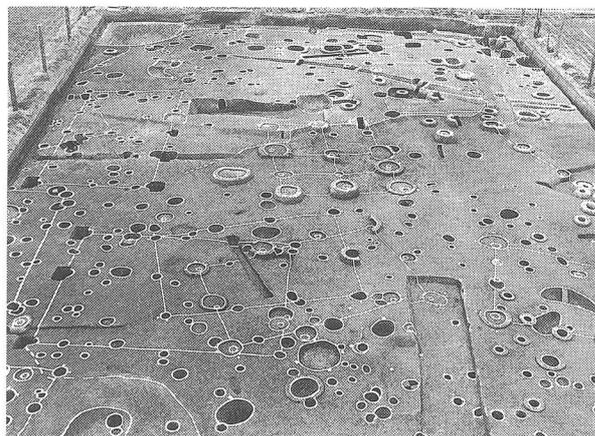


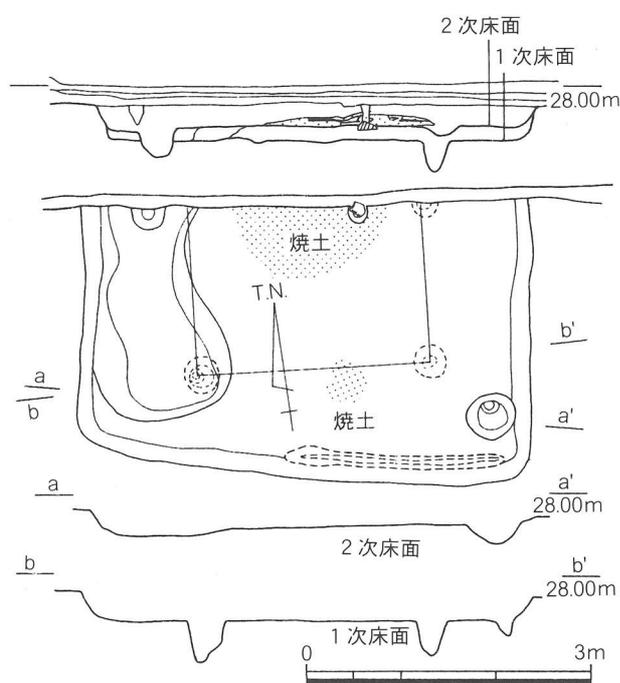
写真41 I b区掘立柱建物群（東より）



写真42 I c区掘立柱建物群（西より）

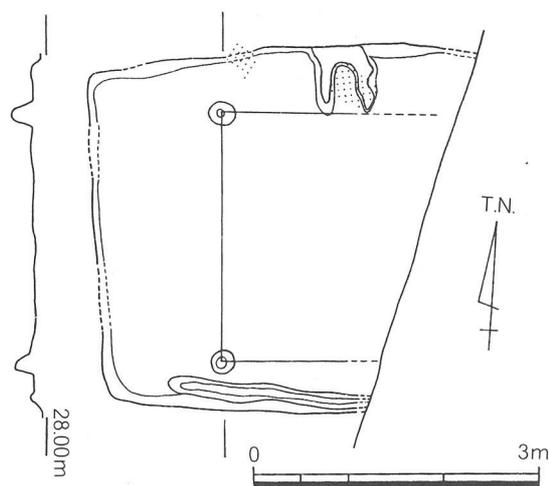
細な時期を決定するにはまだ課題を残すが、概ね7世紀前半頃が主体を占める建物群と考えられる。

SH01 I b区北部で検出した方形の竪穴住居跡である。住居跡の北辺は対象地より外れるため、全体の約3/4検出した。径4.0m 深さ0.4mを測る。住居の床面は2面検出でき、2次期の建て替えが考えられる。下層の一次床面の支柱穴は小型で、径0.4m 深さ0.4mを測る。支柱穴は3柱穴検出したが、形状より本来4支柱穴と考えられる。南辺に幅の狭い壁溝を配している。上層の二次床面の支柱穴は、南東隅で1支柱穴のみ検出した。小型で径0.3m 深さ0.2mを測る。対辺の支柱穴は、床面西部で検出された、幅1.2m 長さ2.2m 深さ0.1mを測る浅い落ち込みのため切られている。床面中央には炭層及び黄灰色粘土が1.6m×0.7mの範囲で広がっていた。上層の二次床面直上より(第33図)の土師器壺



※平面の実線は2次床面、破線は1次床面

第27図 SH01平・断面図(1/80)



第28図 SH03平・断面図(1/80)

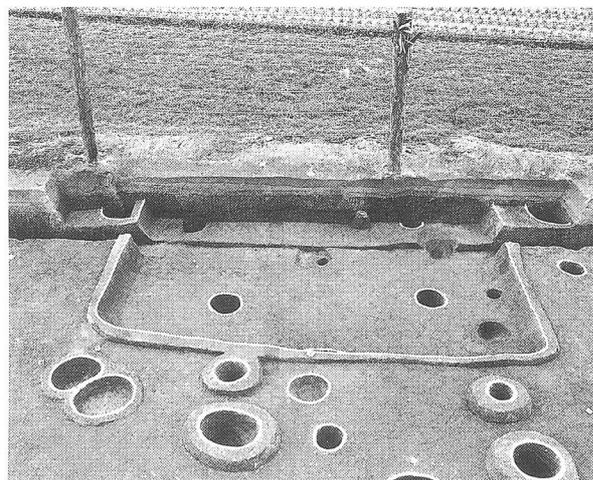


写真43 SH01全景(南より)

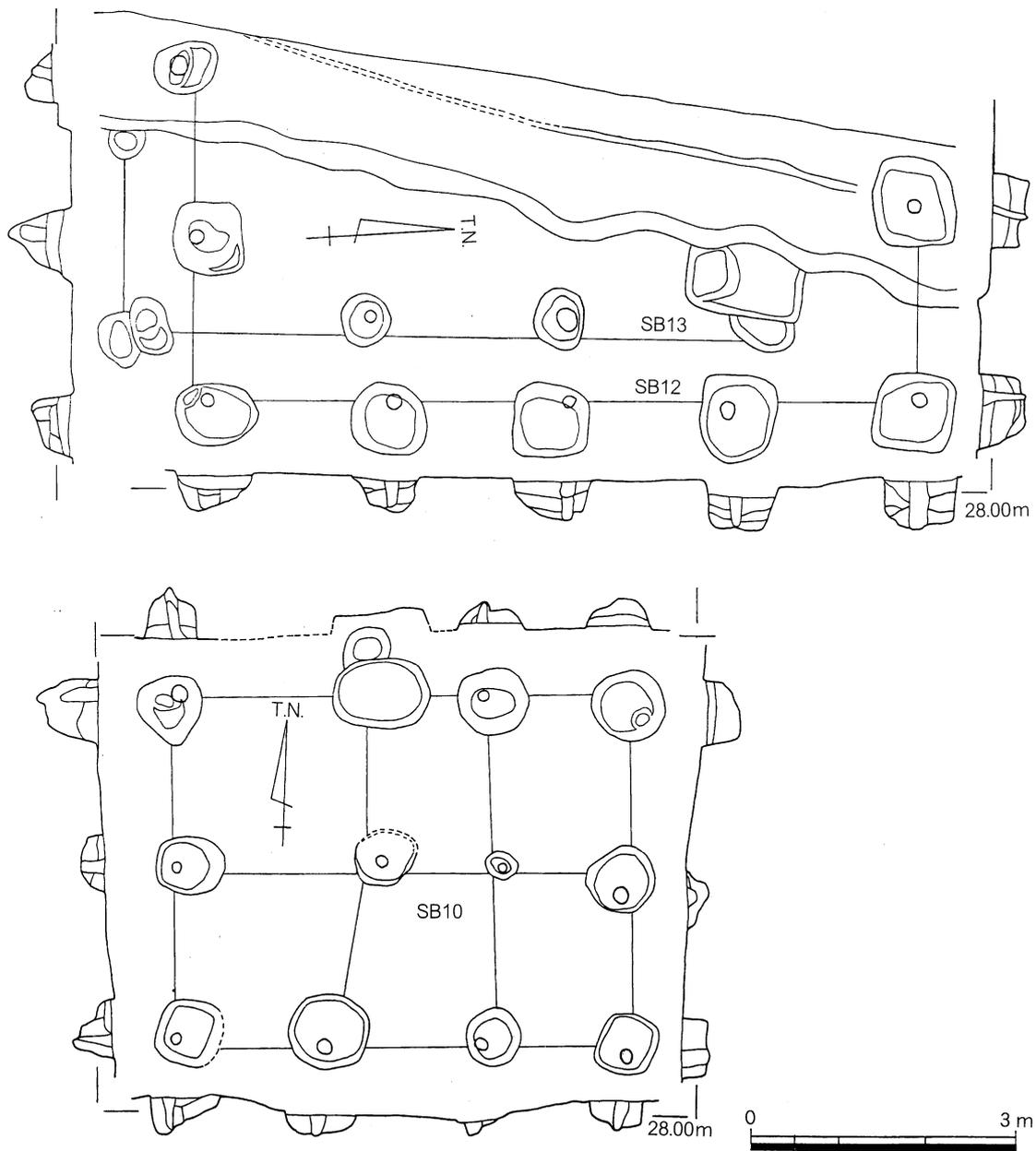


写真44 SH03全景(西より)

等の土器が少量出土している。時期的な点では、6世紀末～7世紀第1四半期前後と考える。

SH03 Ic区東端部で検出した長方形の竪穴住居跡である。住居跡の東辺は調査区より外れるため、全体の約1/2検出した。長径4.0m以上 短径3.8m 深さ0.1mを測る。北辺に造り付けの竈を備えている。支柱穴は2柱穴検出した。支柱穴は小型で径0.2m 深さ0.2mを測る。南辺には幅の狭い壁溝を配している。床面直上より（第33図）の土師器の鉢及び須恵器の高杯片が出土している。時期的な点では、6世紀末～7世紀第1四半期前後と考える。

SB10 Ib区の西部、埋設谷の中位より検出した、東西棟で総柱の掘立柱建物である。桁行3間（5.1m）×梁間2間（4.0m）面積20.4m<sup>2</sup>を測り、主軸方位はN88°Eを測る。柱穴掘形平面は不整円形、断面は不整U字状を呈し、径0.7m 深さ0.4mを測る。埋土は淡黒色系の粘質土である。掘形埋土中より（第33図）の須恵器壺及び須恵器杯、高杯等が少量出土している。時期的な点では7世紀の第一四半



第29図 SB10・12 平・断面図 (1/80)

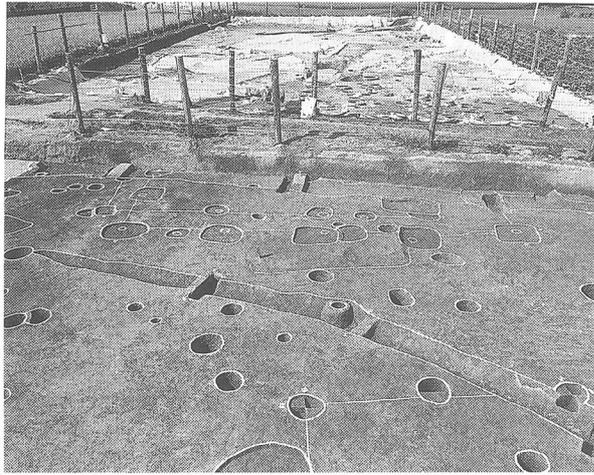


写真45 S B 12・13全景（東より）

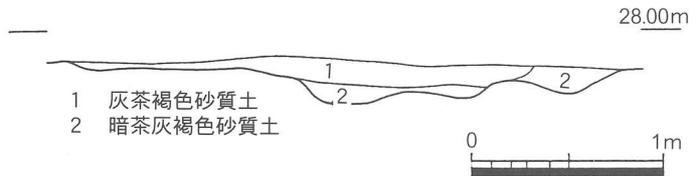


写真46 S B 10全景（南より）

期以降と考えられる。

S B 12 I b 区の西端部で検出した南北棟の掘立柱建物である。西側柱列は調査区外に延びるため約半分を検出したにすぎない。桁行4間（8.0m）×梁間2間以上（4.0m以上）面積32.0㎡以上を測る。主軸方位はN4°Eを測る。柱穴掘形平面は不整形、断面は逆台形状を呈し、径0.8m深さ0.6mを測る。埋土は暗茶褐色系の砂質土である。掘形埋土中より（第33図）の須恵器杯及び土師器片が出土している。時期的な点では、図化した資料以外の遺物より7世紀の第一四半期以降と考えられる。

S D 01 I a 区東端部で検出した南北溝である。検出長14m幅5.7m深さ0.4mを測る。主軸方位はN14°Eを向く。断面は不整形な皿状を呈し、埋土は灰茶褐色系の砂質土である。出土遺物としては土師器片、須恵器杯・壺・甕等が出土している（第33図）。時期的な点では7世紀の第一四半期以降にあたる。



第30図 S D 01 土層断面図（1/40）



写真47 S D 01・02全景（北より）

## (2) 中世

当該期の遺構は、調査区のほぼ全域で検出しているが、大まかにみて ①I a 区中央部、②I b 区中央部 I c 区東部、③I c 区西端部の3地域に集中する。主要な遺構では、S B 23～34、S E 01、S D 12等の遺構である。

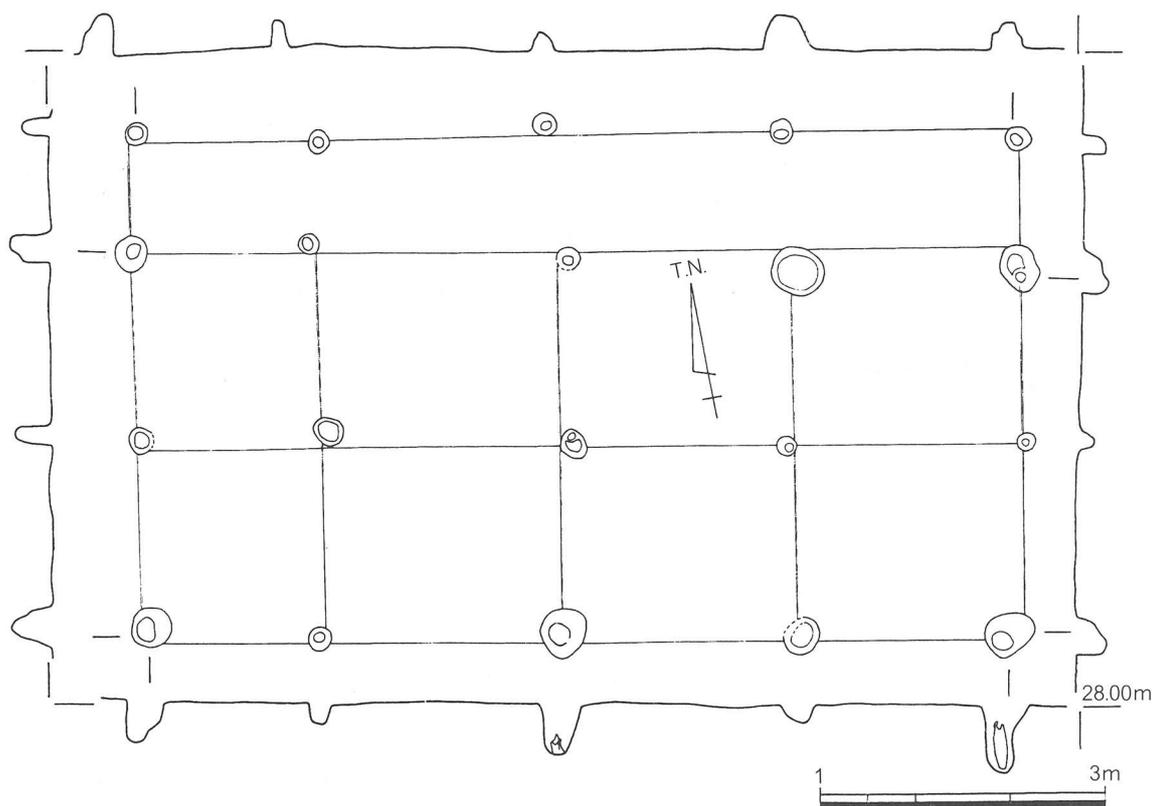
掘立柱建物は合計で11棟検出しているが、柱穴出土の遺物が乏しく、取りあえずこの時期に含めている建物も数棟ある。また、先の①②地域では多量のピットが集中しており、整理の段階で更に新たな建

物が設定できる可能性が高い。これらの建物群を主軸方位より分ければ3グループに分けられるが、現在の地割り方向に向く建物が主体を占め、古墳時代の建物に比べかなりまとまった方位を示す。建物群を分布範囲より分ければ次のA～Dまでの4グループに区分できる。A：I a区中央部（SB23～25）B：I b区中央（SB26～31）C：I c区東部（SB32・33）D：I c区西端部（SB34）以上である。AグループのSB23は底を備えた大型の建物であり同グループの中心的建物と考えられる。CグループのSB32・33の周辺には、建物に伴う小規模な区画溝が検出されている。集落の小単位の構造を理解するうえで貴重な資料である。これらの建物群の詳細な時期を決定するにはまだ課題を残すが、概ね13～14世紀前後が主体を占める建物群と考えられる。



写真48 I a区 中世ピット群（南より）

SB23 I a区の中央、埋設谷の上面で検出した東西棟で、北辺に底を備えた大型の総柱の掘立柱建物である。桁行4間（9.3m）×梁間2間（4.0m）面積37.2㎡を測り、主軸方位はN80°Wを測る。柱穴掘形平面は円形、断面はU字状を呈し、径0.4m 深さ0.5mを測る。埋土は淡灰色系の砂質土である。掘形埋土中より（第33図）の土師器の小皿が出土している。時期的な点では13世紀前後と考えられる。



第31図 SB23 平・断面図（1/80）

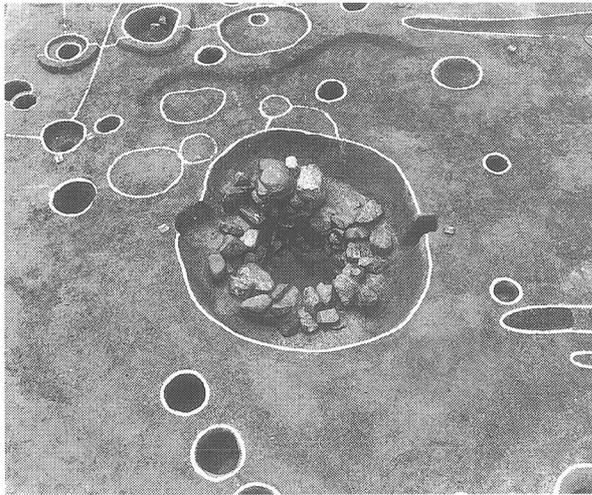
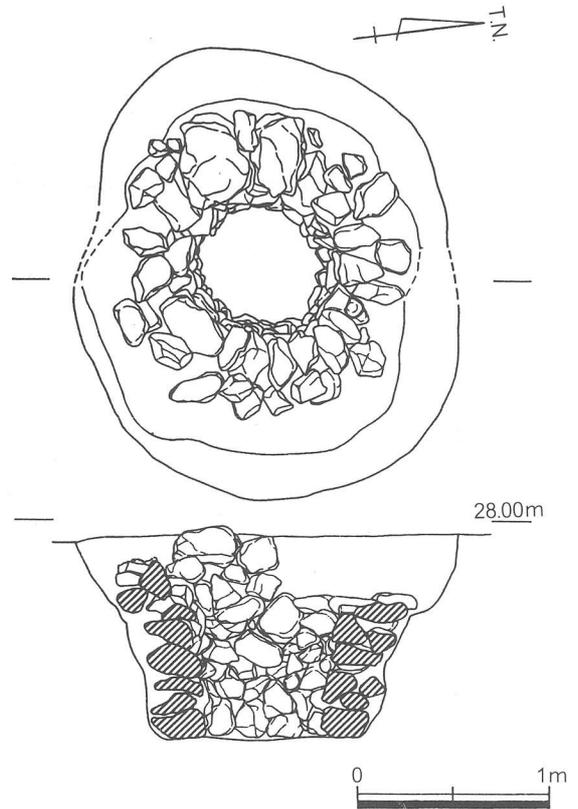


写真49 SE01全景（東より）

SE01 I a区の中央，埋設谷の上面で検出した石組井戸である。掘形の平面形は楕円形，断面は逆台形状を呈する。長径4.7m 短径4.0m 深さ2.1mを測る。石組は6～7段積みで円形に組み上げている。井筒の内径は1.2mを測る。埋土を大別すれば上・下2層に分けられる。上層は暗茶褐色粘質土，下層は暗灰褐色粘質土である。出土遺物としては，土師器杯・小皿，須恵器壺・甕等が出土している（第33図）。时期的な点では13世紀前後と考えられる。



第32図 SE01平・断面図（1/40）

SD12 I c区西端部のSB34の西辺に位置する南北溝である。位置関係よりSB34の雨落ち溝と考えられる。検出長5.8m 幅0.5m 深さ0.2mを測る。主軸方位は $N4^{\circ}E$ を向く。断面は不整形なU字状を呈し，埋土は灰褐色砂質土である。出土遺物としては土師器小皿，瓦器碗・小皿，須恵器壺・甕等が出土している（第33図）。时期的な点では13世紀以降と考えられる。

### (3) 近世前半

当該期の遺構は，I a区を中心に検出している数条の溝状遺構のみである。したがって当該期には全域耕作域として利用されていたものと考えられる。代表的な遺構としてあげられるのは，SD07～11等である。これらの溝群は現地割に符合する形で配されている区画溝である。

SD07 I a区中央埋設谷上面で検出した南北溝である。北端部はSD08に切られているが，検出状況よりこの溝は，本来SD08より分岐する溝の可能性が高い。検出長14.5m 幅3.5m 深さ0.2m

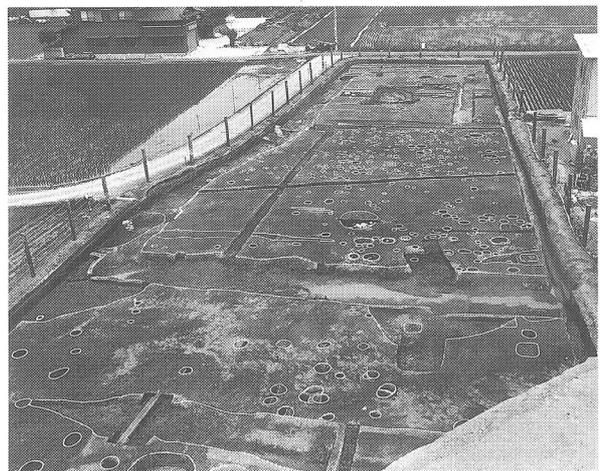


写真50 I a区全景（西より）